2．歴史・文化関連資料の整理

地域の歴史・文化資源及び、文化財等について地域独自で取組んでいる保全・活用の把握を目的に宇宜野湾郷友会、宇神山郷友会が作成した資料を以下に紹介する。特に地域の文化財等に関連する記述を抜粋して整理する。

出典:「宇宜野湾産泉保存整備マスタープラン報告書」、平成 15 年4月、宇宜野湾郷友会

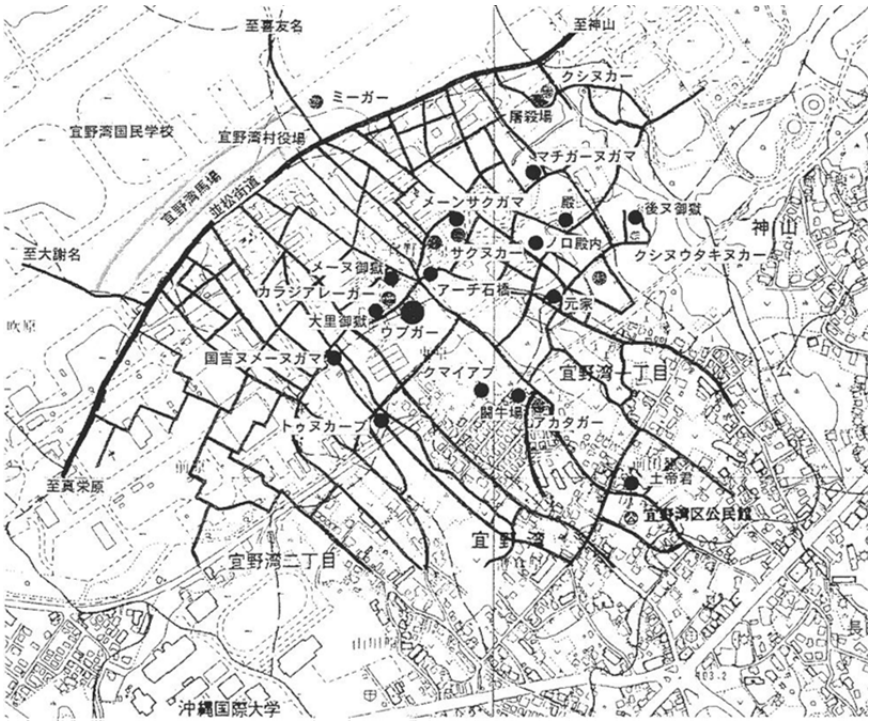
Ⅰ　概況把握

1. 宇宜野湾産泉の概要

1)位置･概要

宇宜野湾産泉は、通称メーヌカー(前の川)と呼ばれ、またウフガー(大川)とも言った。郷友会製作の「昭和拾九年当時の字宜野湾地形図」でみると、部落のほぼ中央、集落のやや南端寄りに位置していた。築造年代については判然としていないが、屋号チャシの先祖チャシヌヒヤーという方が墓を造るためにこの地を掘ったところ湧水が出てきたので墓ではなく泉にしたとの伝承がある。昭和初期に水浴場石積みの崩落があったが、昭和8年にシルークルー政争の終結を記念して区民一同での改修工事が行われ、産泉の碑が建立された。産泉は範囲の広い宇宜野湾における生活用水の主水源であったため、朝夕などは水汲みの順番待ちの列ができる事もしばしばあったという。戦後、普天間基地建設により集落が現在地に移動してからしばらくも生活用水として使用されていたが、距離が遠く不便であった。こうした中で昭和 36 年に簡易水道工事が着工、昭和 37 年に落成した。この際、ポンプ小屋と取水タンクの設置により、産泉の石積みや地形が一部改変されている。昭和 43 年に市の上水道が給水され、簡易水道の給水は打ち切られた。現在、基地フェンス内に位置する産泉は毎年郷友会により清掃が行われているが、周辺地形の改変により土砂が流入し、石積みの大部分が埋没した状況にある。

現況地形地積併合図における旧集落と産泉の位置

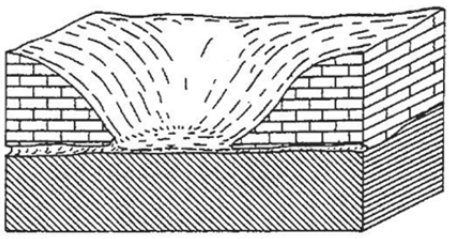


2)産泉及び周辺の地理的特徴

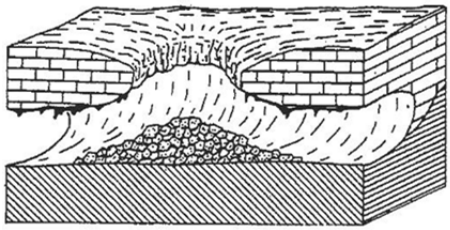
字宜野湾の地理的な特徴について字誌でまとめられているが、特に産泉及び周辺に関連する部分について以下に抜粋する。また、この部分の筆者である上原富士男氏(沖縄大学法経学部助教授)と産泉に同行してもらい、現場踏査を行なって、産泉に関しての意見を頂いたのでこれも併せてまとめた。

①産泉及び周辺の地理的特徴(字誌より)

海岸段丘を構成し、炭酸カルシウムを多く含む琉球石灰岩は、炭酸ガスを含む水によって溶かされる。その結果、段丘面上にはドリーネやウバーレ、石灰岩堤、洞穴(鍾乳洞)、ポノール(吸い込み穴)、カルスト湧泉などのさまざまな地形が形成される。このように石灰岩などの岩石が溶食されて生じる凹凸に富む地形をカルスト地形という。ドリーネは円または楕円形の輪郭をした摺鉢状ないし皿状のカルスト凹地である。ドリーネは成因から、石灰岩の溶解によって形成された溶食ドリーネと、鍾乳洞の天井の一部が崩壊して生じた陥没ドリーネなどに分類される。メーヌカードリーネは海岸段丘中位面の 80～90m付近に位置する。ドリーネの底には、カーグムヤーガマなどの鍾乳洞が存在する。メーヌカーは、ドリーネ中に湧出するカルスト湧泉であり、メーヌカーの湧水はドリーネの中にあるカーグムヤーガマに吸い込まれる(下図)。すなわちカーグムヤーガマ鍾乳洞は地表の水が地中に吸い込まれるポノールである。メーヌカードリーネは長径が約 70m、短径が 60m、深さが 6mほどの巨大なドリーネである。このドリーネは一部に急傾斜するドリーネ壁と鍾乳洞が存在することから陥没ドリーネと考えられる。

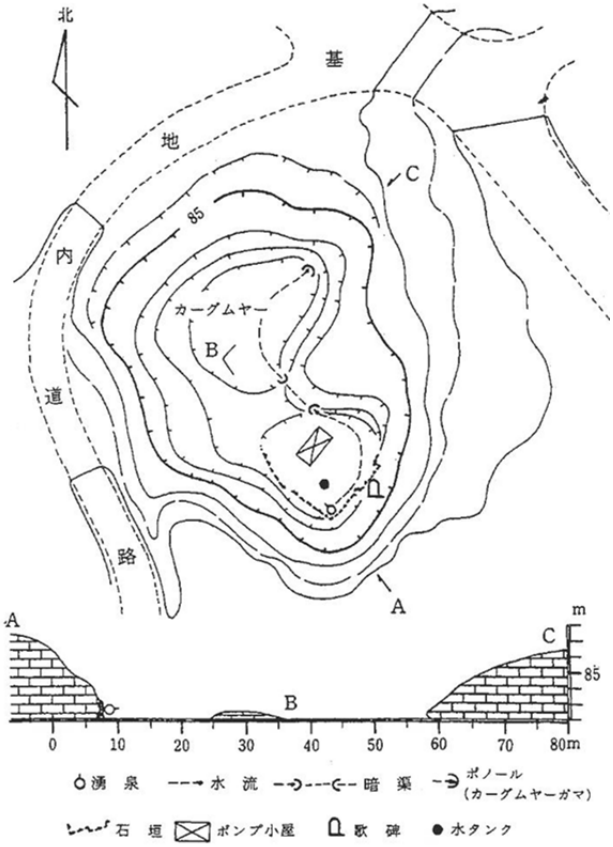


溶食ドリーネ



陥没ドリーネ

溶食ドリーネと陥没ドリーネの模式図
(上原作製)



メーヌカードリーネの地形図および
模式断面図
(宜野湾市発行「$\frac{1}{500}$宜野湾市地形図ＪＥ－06－08－01」に加筆・修正を加え上原作製。等高線間隔は１ｍ。)

②現場踏査における専門家の意見

【平成 15 年3月 19 日、上原富士男氏(地質:沖縄大学法経学部助教授)】

・ここは石灰岩の厚さが5～6mだと思われ、掘ればおそらく基盤のクチャがでてくると思う。

・カーグムヤーガマの規模からしてもここはそう大きくない鍾乳洞なので、小規模な陥没で先ず小さな穴ができて、周りがだんだん崩れて、広いドリーネになったと思う。しかし最初は洞窟の陥没という事になるはずなので、全体を見ても陥没ドリーネと判断しても良い。いきなりこの広さが陥没したという訳ではない。しかしここは岩塊がないから、おそらく昔々から石をどこかへ持って行ったり、或いは石垣の石に加工していたかも知れない。

・大体、陥没ドリーネというと、穴の周辺が急傾斜で崖になっている。そういうものは陥没ドリーネと言って良く、ウブガーも陥没ドリーネとしては典型的なところで、泉としてかなり加工されていておもむきが変わっているが、陥没ドリーネの1つの模範として見てみたい。

・ドリーネ中央を横切るようにあるカーミチは盛り上がってドリーネの穴を2つに分けているが、この道路部分は人為的な盛土で、元々このドリーネは1つの穴になっていたと思う。ここは元々宜野湾の集落内なので、ここも南北道路の1つとして整備されたと思われる。

・このウブガーはかなり手が加えられていると思う。ドリーネをうまく利用して、しっかりとした石積みを、しかも大規模に作っているというのは例にないのではないか。野嵩クシヌカーよりはるかにこっちは規模が大きい。

・ここは直ぐ側にメーヌウタキもあり、普天間基地返還後の集落再生時の要になる。沖縄の集落の立地という事に関して非常に顕著な例として、又、歴史、文化、地理という事を考える場合、素晴らしい教材になる。

・このウブガーは普天間飛行場返還後の再開発の際には重要な要として位置付けていく必要がある。この石積みを作っている範囲というのは、宜野湾でもおそらくトップクラスではないか。水の量はたしかに国道 58 号の下の段丘崖に多く、規模的にはチュンナーガーも大きいが、北側の国指定文化財チュンナーガーに対して、南側のこのカーも重要な文化財として、再開発の際、1つの文化的・歴史的基盤として位置付けられるのではないか。

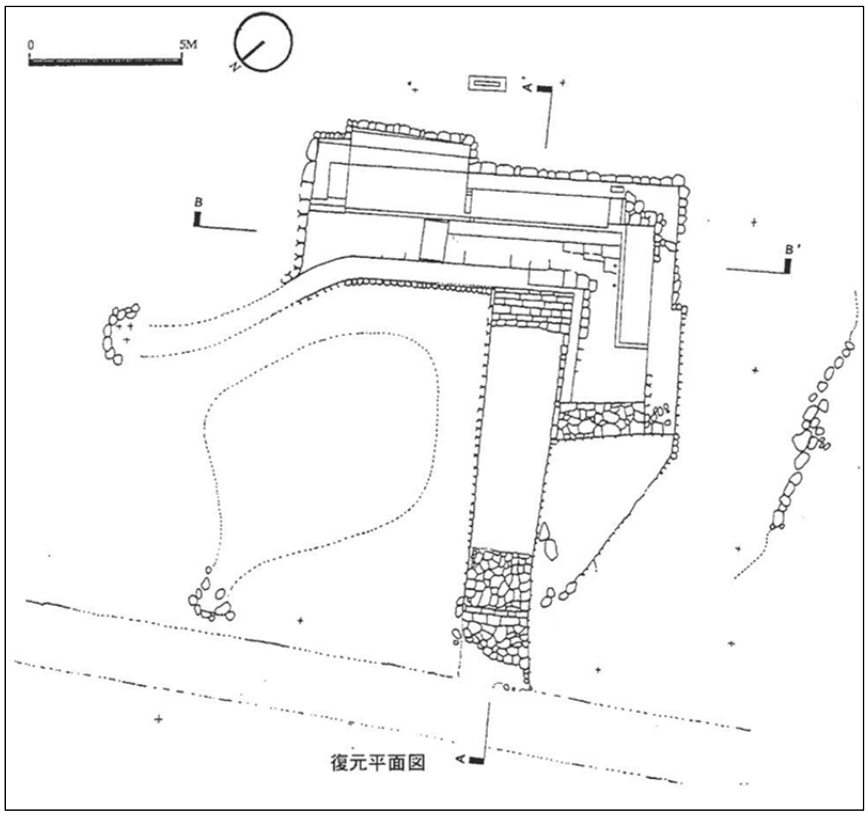
・この東の方にクマイアブという小さな陥没ドリーネがあり、そこに水はつながっている可能性がある。鍾乳洞の入口があって、そこに香炉が置かれて拝まれている。やはり字宜野湾にとって1つの要的な土地である。向こうにはクシヌウタキもある。又、ミーガーというのがあったらしくて、このカーの水はおそらく洞穴の中に入っていると思う。このように宜野湾の自然的特性のドリーネがあって、地下水が流れており、又、地表水が流れていて、地中に浸透していて、この辺りは非常にカルスト地形的にも1つの良い例として評価できると思う。

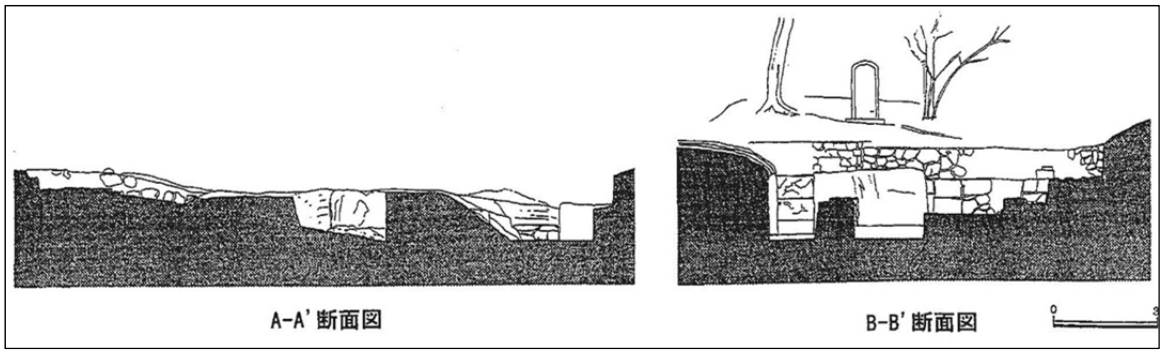
・このドリーネでは、地下水が沸き出してしみ込んで行くし、地下の様子が分かる。こういった場所をカルストの窓(カルストウィンドウ)と言う。ただ地下水が流れている事で、地下の状況が見えるという事である。そうでないドリーネもある。

3)字宜野湾産泉調査報告書(平成6年 12 月)の概要

平成6年に郷友会の委託により、産泉復元整備の基本調査が琉球大学工学部環境建設工学科建築計画学福島研究室(福島駿介教授)によって行われている。報告書では聞き取り調査と試掘、実測調査等の状況と、これらの結果から産泉の石積みや構成を復元平面図として表している。ここではその復元平面図と断面図、さらに調査時の試掘の概要を以下に示す。

①字宜野湾産泉調査報告書における復元図





字宜野湾産泉第1回聞き取り調査概要

1. ウプガー本体について

①普天間基地にフェンスを張り巡らされて立入り禁止となる前は、戦後直後までは形としても姿は残っていて、宜野湾区民の生活用水に使われていた。

②貯水桝の深さは、感覚では、1mくらいの深さだったと思う。子供が溺れる事など無かった。

③雨降りの時には、カー全体が土砂水でいっぱいになり、戦後は碑のある高さまで水が溜まっていた。戦後に水の流れが悪くなってそうなったのか、それとも戦前からそうだったのかというのは分からない。

④3ヶ所とも貯水桝の天端は同じ高さだったが、深さは、左の方が浅かった感じだった事以外は覚えていない。

⑤カーへ下る道は全て石が敷かれていて、3段くらいの段差になっていたと思う。

⑥水は（北側の）ガマの方向に流れていた。もしかしたら、カーグムヤーガマの方向へも奥でつながっていたかもしれないが、わからない。

⑦ウブガーの石畳の所にタンクを作った時の大雨時に、何百年にもなる石垣（南側）が壊れた事があった。水が

噴出していたから水圧で壊れたと思う。この壊れた石積みは修復せずにそのままである。

⑧碑文が出来たのは昭和8年で、渡嘉敷唯徳さんが作り、文字は普天間のオジーが書いたらしい。

⑨話によると、碑文は下の石積みが崩れた時に、修理するついでに建てたらしい。以前は向かって左右とも同じ2段構えだったけど、今は左側の形が違っている。昔の事だからハツキリ解らないが、積み直したらしい。

⑩貯水桝の深さは 50～60cm くらいだったと思う。女性の水浴び場所側はやや浅かった覚えがあるが、そんなに差はなかった。

⑪貯水桝の底は水が溜まっていて見えなかったが、クチャかニービだったと思う。

⑫飲料水の貯水桝と南側の貯水桝（男性の水浴び場所側）は、間にボーウチの石があったからつながってはいなかった。ボーウチとは天秤を担ぐ棒の事で、それをここに置いて水を汲み、また担いでいった。

⑬ウコー口は段の下にあったはずだが、ハツキリと場所は覚えてない。

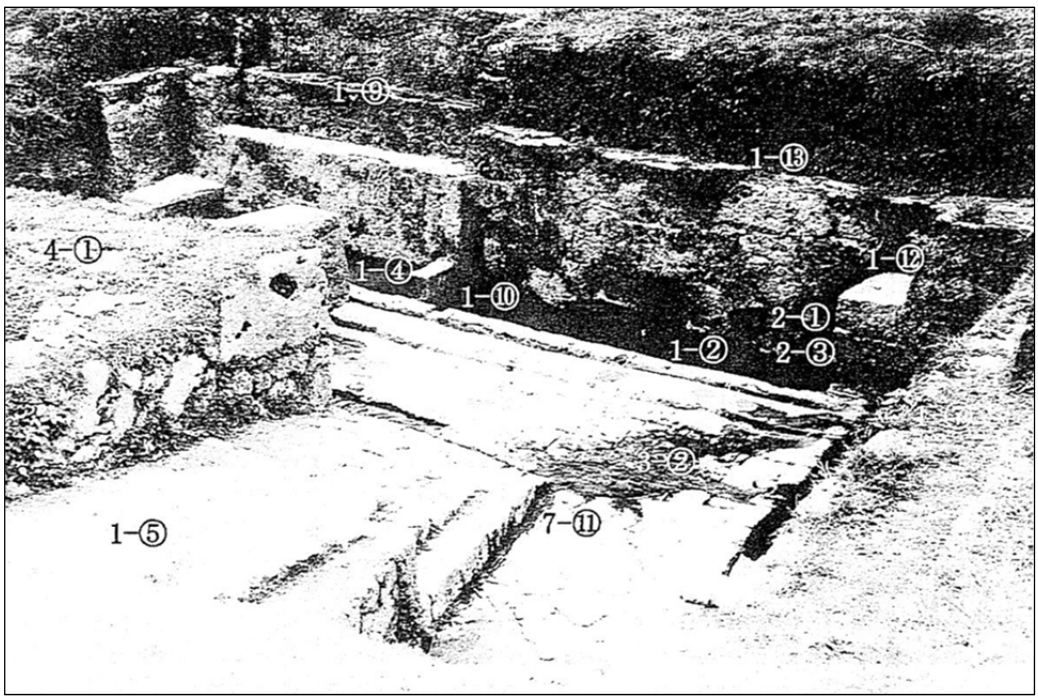
⑭このカーの後ろは相当盛り土していると思う。カーの上の土手には芝生が生えていた。カーの周りにはキビやイモの畑ばかりだったと覚えている。

⑮以前は周りにはほとんど木はなかった。カーの上部（南東側）にサルスベリの木が何本かあり、姉さん達が洗濯物を干したりしていた。それに、竹も左側にあったような気がするがハツキリ覚えていない。サルスベリは正面の土手に3本あり、皆が洗濯物を干すから横に広がって伸びていたのを覚えている。

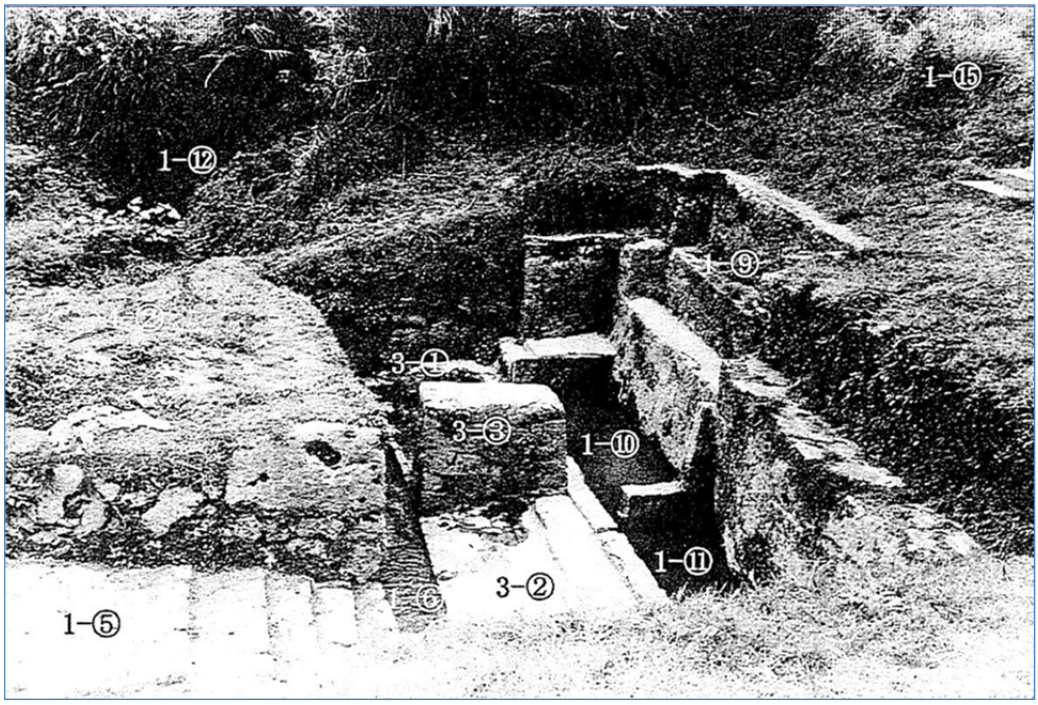
2. 吐水口について

①吐水口は上に四角い穴が開いていて、そこから水が流れてきていた。穴は2つだったと思う。右側の穴は鍾乳洞につながっていた。実際に我々は、戦争時に避難していて、クマイアブからカーに進んで行ったら、途中でロウソクの火が消えてしまい、危ないので引き返したこともあった。ここらが、一番新鮮な水が出ていたはずである。

ウブガーへ下りる道から貯水桝にかけての以前の様子



貯水枡周辺の以前の様子



②吐水口の2つの穴が奥でつながっているかは、年配の方々に聞かないと解らない。

③吐水口のどちらが水量が多かったかとかは、同じ水面につかっていたので見た目は解らない。いわゆるヒージャー（樋川）ではなく、穴の奥で湧いて、水が溜まっている所と同じ高さになっていた。

④吐水口は飲み水を取る貯水枡側に2ヶ所、女性の水浴び場側に1ヶ所小さな穴の、計3ヶ所あった。3ヶ所とも奥の方で湧いた水が流れてきていた。夏になると、ウナギの稚魚が流れてきたりもしていた。吐水口の大きさは真ん中が大きかった。

3. 水浴び場について

①水浴びする場所は、石で出来た仕切があって男女分かれていたが、私たちの時期には女性は使用しなくなり、女性の浴びる場所も男が利用したりしていた。

②飲み水をとる場所の手前が洗濯場になっていて、洗濯をする所は線が引かれていて少し低くなっており、その線から貯水枡側に出ては行けないと言われていた。洗濯する場所は、窪んでいて水が溜まっていた。

③男性が水浴びする場所は、洗濯をする場所と同じだった。左は女性が水浴びをする場所だった覚えがある。それとこのチラカクシ石は、横（西側）の土手と同じ高さだった。

④女性が水浴びしている時はやはり見えてしまうので、浴びているなぁと思ったら寄らなかった。覗きも、カーグムヤーの方から上っていったら見えたかもしれないが、ここを使う人は部落の人達と限られていたので、そんな事をしようものならすぐにばれてしまうので、そんなことはしなかった。

4. カーシッティー（カーシーリ）について

①大雨で溢れた時にはカーシッティー（カーシーリ）にも、水が流れていたので、この部分は模型よりもっと低い小さい土手で、暗渠ではなかったと思う。でもカーシッティーからカーグムヤーへは暗渠だった。ここに水があるのは大雨の時だけで、晴れている時や普段は水が無かった。

②カーシッティーには普段は水も無かったので、利用もなかった。歩く時には見えはしたが、草もたくさん生えて、下りた事も無かった。ここはそうとう埋まったと思う。

③カーシッティーの底は草も生えてよく分からなかったが、戦後の時期の記憶では水路側より底の地盤は高く見

えていた。戦後はカー掃除の時は浚ったものをカーシッティーに捨てたりしたが戦前はそんなことはしなかった。

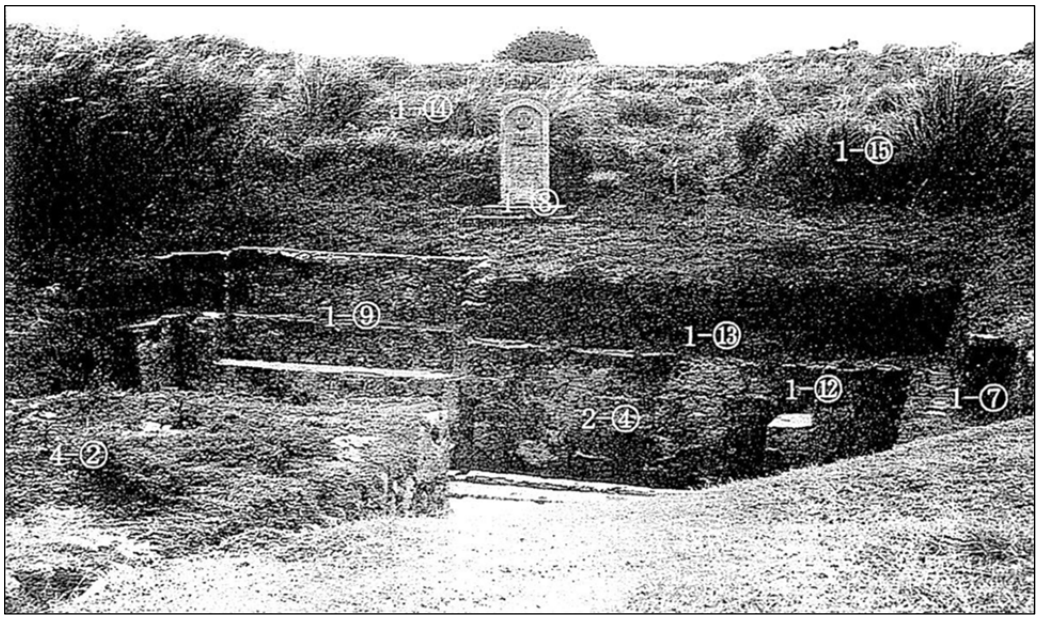
④カーシッティーはその当時は利用もされていなかったので、機能は分からないが、わざわざこういう形に作られているということは、カーが作られた時期はなんらかの機能があったのだろうと思う。

5. カーミチについて

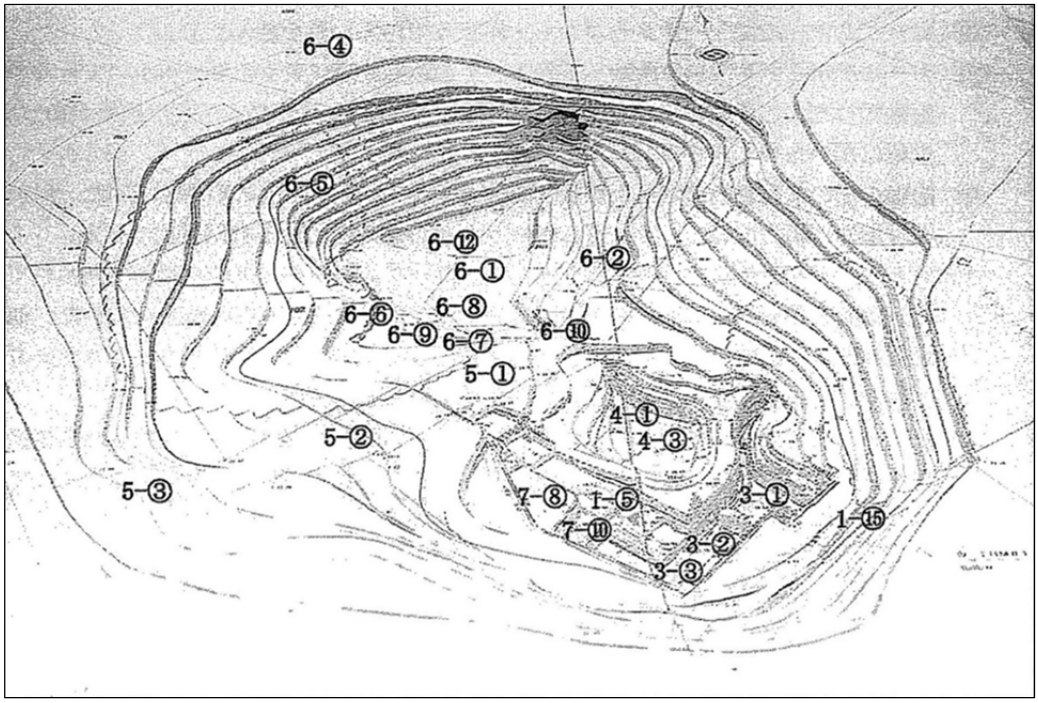
①このカーミチの幅は特に広かった。ここ以上に広い道はなかった。そこは石敷きでなかった。幅が3間くらいでカーに下りる道だけが大きかった。

②カーミチはカーに行く為に作った道だけだから、100mはなかったと思う。大里御獄に行く手前のＴ字路から、ウブガー越えてカジマヤーまでが広い道だった。

ウブガー周辺の以前の様子



ウブガーとカーグムヤーガマ周辺の模型



③カーミチは、模型のようには窪んでなくて、感覚的にはほぼ真っ直ぐだったように覚えている。周りが盛られて高くなっているせいかも知れない。

6. カーグムヤーグムイ、カラジアレーガーについて

①カーグムヤーには水はいっぱいあって、馬を泳がせたりもした。こっちにはカラジアライガーという別のカーもあって椅麗な水があった。

②このカーグムヤーグムイの周りは、今は木が茂っているが、個人有地で、御獄と畑だった。カーグムヤーとカーミチの間に、道に沿うような形の長い畑があった。

③字有地はカーミチとクムイだけである。現在の地籍の形は違うと思われる。地籍図は字の図面に残っているはずだから、見てみるといい。

④カーグムイと集落の間には畑があり、メーヌウタキがあった。メーヌウタキは木が茂り森になっていたと思う。

⑤クムイの傍には木は生えてなくて、ススキ等が生えていた。クムイの傍にアカギがあった。カラジアライガーに近かった所だった。

⑥カラジアライガーは椅麗に石積みされていた。崩れずに埋まっているはずだから、掘れば出てくると思う。ちゃんと水が溜まる所もあって、ヒージャーではなく湧いていた。

⑦カーミチからカーグムヤーに行く道も石畳だった。長さは解らないが、クムイの上はカーの前まで石が積まれていて、クムイとの間は広場になっていたと思う。

⑧カーグムヤーにはマーチヌゥボウも1本立っていて、馬を結んだりした。

⑨カーミチから下りていく所から石畳で、そこからカラジアライガーへ歩いて行く所も石畳だった。土手側は石が積まれていたし、カーグムヤーグムイとは段差があった。道幅はだいたい 4 尺くらいだった。

⑩暗渠の上の木は戦後の木だと思う。昔はホーガーギーというのが生えていた。以前はよく境界に植えていて、カーグムヤーグムイの畑の傍にもそれが生えていた。

⑪カラジアレーガーまでは石積みだったが、カーグムヤーグムイは石積みで囲われていたかは覚えていない。カーミチの所はさっきの畑でホーガーギーが生えていた。他の場所は開けていて、アカギがあったくらいだと覚えている。戦争でカーグムヤーガマに避難していた人達もいるので聞いた方がよい。

⑫クムイの深さは馬が浸かるくらいで、6尺くらいだったと思う。馬に乗ったまま水に浸かったのを覚えている。馬も首から上しか出てなかったから今はだいぶ埋まっているはずである。

7. カーの利用や行事、その他

①一番大事なのは旧正月に汲んだ若水だった。汲む場所は飲み水を汲んでいた場所だったと思う。ほとんどの宜野湾の人は、自分の家に井戸を持っていても、旧正月の若水をウサゲルためにここに水を汲みに来ていた。

②正月に水を汲んで、それからクガニーを入れてクガニミズと言った。

③大正の時代になると、各家庭に井戸が出来てきたが、それ以前は色々な部落の水はこの水だった。水は毎日汲みに行っていた。

④ここのカーを使う時の文章化した決め事は無かったが、個人個人の常識で言われなくても解っていたし、皆が使う場所なので汚してはいけないというのがあった。年上から厳しく言われていた事は今でも覚えている。

⑤戦前の話だが、字宜野湾小学校の建築中に、大工さんが毎日ここに水を浴びに来ていた時があって、このカーの水溜めに石鹸や手拭いを浸けたりしていた事がここらへんで噂になり、その人はものすごく怒られて殴られたりした事があった、という話を聞いた事がある。

⑥カーはほとんど女性が使っていた。水浴びや洗濯をしたり、飲み水を汲みに行ったりしたので、男性よりは女

性のほうが使っていたと思う。

⑦戦前、各家庭に井戸が出来るまでは女性も水浴びに来ていたが、それ以降は子供や男性が使うようになっていった。

⑧年配の方に聞いた事では、夕方から2～3人でカーに行き、入口付近に芝生の植えられていた広場があり、そこで相撲をとったりしていたそうである。

⑨相撲をやったという話も、それは洗濯に行く姉さん達に子供達もカーに行きたくてついていって、集まっていたずら半分にやっていただけの話である。

⑩台になっている部分は、荷物を置いたり、棒を置いたり、着物を脱いで置いたりもしていた。イモクジアラヤーの時に、デンプンを取るために洗ったものを置いたりもした。ソラマメも茹でたものをここに洗いにも来た。昔はビタミン C を含んだ部分は全部洗って流してしまい、残りカスを食べていたけれど、美味しかった。

⑪ウヮークルシビィーにウブガーの排水路付近でつぶしたというわけではなく、そこでワタグヮーを洗っていた。洗濯をする所そばの排水路に近い場所で洗っていた。

⑫カーの利用で一番肝心な事は、正月の初水汲みと、赤ちゃんが生まれた時の初浴び用の産湯に使う事である。それで「ウブガー」となっている。

⑬亡くなった方も同じ水で、アミチョージィーしよった。戦前までだったと思う。言葉も無くなっている。

⑭部落全体で、毎年6月 25 日に一番近い日曜日を選んで拝みに来ている。ツナヒチウガミと同じ日だった。

⑮カーウガミは盛大にやるわけではなく、部落の役員2～3人がウガミにいくだけである。

⑯戦後は、カーの付近は薬莢の鉄筒が大量に棄てられていて、くず鉄ブームの時に皆で掘って取りに行った事があった。今も掘ったら出てくるかもしれない。

字宜野湾産泉第2回聞き取り調査概要

1. ウプガー本体について

①洗濯をする場所では、10 人くらいが一緒に洗濯していたので、模型よりも広かったと思う。石積みは現在残っているので、階段部分がもう少し向う側へよるかもしれない。

②カーの上部はモーになっていて、サルスベリの木が生えていて、その木や土手に洗濯物を干していた。サルスベリの木は、南東から南部分にかけて生えていた。

③入口の三角になっている場所では、相撲をとった。風呂を浴びるのは、女性優先なので、順番待ちをしたりもしていた。

④碑文下の石積みは、長雨が原因で崩れたのを積み直したもので、もともとは側と同じ2段構えだった。

⑤カーへは、周囲から水が入ってこないように、周囲は土手で囲まれており耕作地との高低差は、人が隠れるくらいあった。

⑥洗濯等で汚れた水は、この水路からカーシーリーへ流れていた。

⑦洗濯用の貯水桝には、オーバーフロー時に流れ出す溝が付いていた。そこから常に水が溢れだし、洗濯をする場所の窪んだ所に流れていた。

⑧女性が水浴びをする側の貯水桝にも、オーバーフロー時に流れ出す溝が付いていた。

⑨水の量は、うっかりすると洗濯物が流されてしまうくらいの量がずっと出ていた。

⑩飲料水の貯水桝の水量が、洗濯物を洗う側の貯水桝の水量より、多く出ていた。

⑪貯水桝の深さは、人の腰くらいの高さがあった。

⑫貯水桝の底はコンクリートや自然の石ではなくて、人が敷いた石があった。

⑬階段横の三角形の形をした場所は、模型よりも狭かった。雨降りにはこの場所の高さまで泥水が溜まっていたのを憶えている。

⑭水浴び時に相撲をとった場所は、三角形の形をした場所ではなく、その上の部分だった。そこは模型のように傾斜ではなかった。

⑮洗濯用の貯水桝の奥側壁と敷石との境目から、チョロチョロと水が湧いていた。

⑯ガマグヮーの回りは木が茂っており、上の部分は竹が生えていた。

⑰場所の名前は特になく、チラカクシイシという名前だけ付いていたのを憶えている。

⑱階段横にある小さな四角い段は、上手な人が一人で頭に桶を載せる時にも使用した。

2. 吐水口について

①ワク（水の出てくる部分）は、洗濯物を洗う側の貯水桝と飲料水の貯水桝の2カ所にあった。女性が水浴びする側の貯水桝へ、飲料水用の貯水桝側から水が流れこんでいた。

②洗濯用の貯水桝のワクは南端にあり、飲料水用の貯水桝のワクは洗濯用の貯水桝と飲料水用の貯水桝の間にある石にあった。

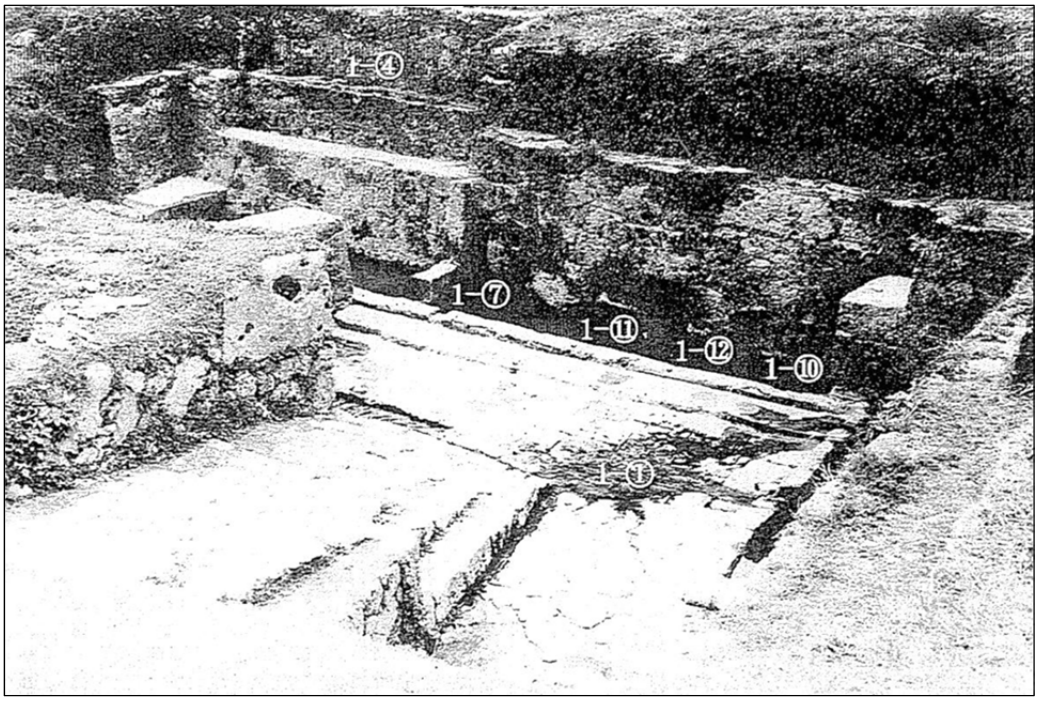
③両方のワクは水面より下にあり、底から四角い形の穴が開いていた。大きさは、人がくぐって通れるくらいだった。

3. 水浴び場について

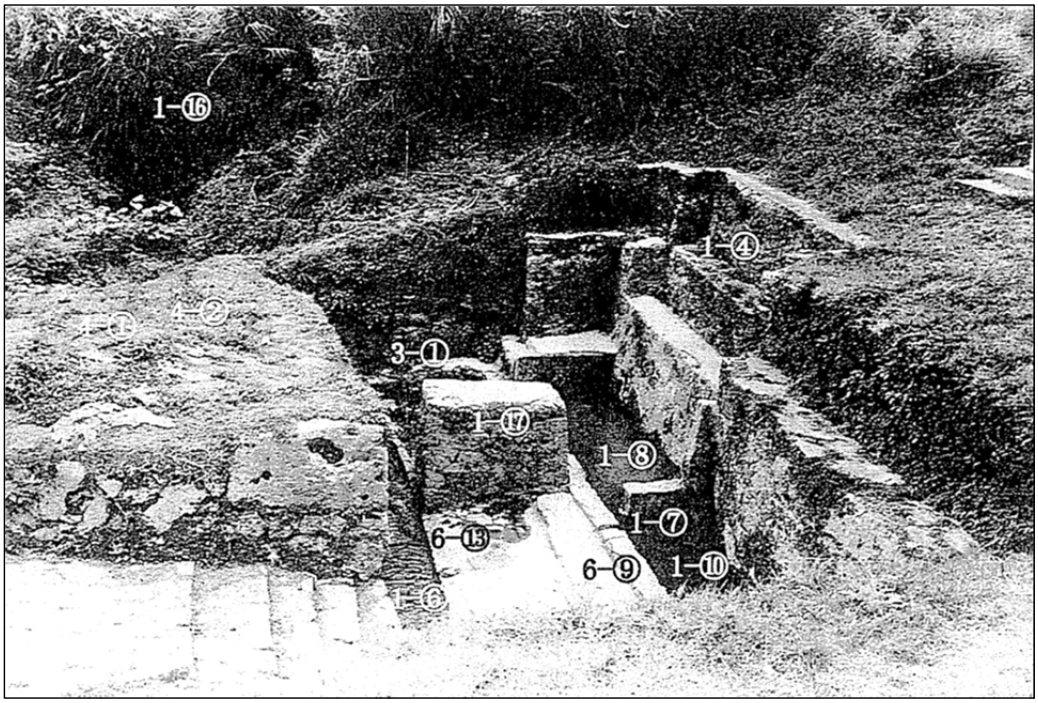
①水浴びをする場所は男性も女性も同じ場所で、女性が優先だったけれど、男性が水浴びをする姿はあまり見なかった。

②男性はカーグムヤーの所でも水浴びをしていた。

ウブガーへ下りる道から貯水桝にかけての以前の様子



貯水枡周辺の以前の様子



4. カーシッティー（カーシーリ)について

①カーシーリは、使われていたという話を聞いた事がない。汚れ水も、ガマのほうへ流れ、カーシーリにはあまり流れていなかった。

②カー掃除のゴミや貯水桝の底に溜まった泥等を捨てていた。

5. カーグムヤーグムイ、カラジアレーガーについて

①カラジアレーガーという別のカーがあり、四角い囲いがあって水が溜まっていた。

②カラジアレーガーは四角い粋があり壁面も石積みがあり、高さは6尺以上だった。水の溜まる粋があり、その前は石が敷かれていてカーミチへつながっていた。

③カラジアレーガーが、ここだと思う場所はあるけどハッキリとは分らなくなっている。

④カラジアレーガーの利用は、ウブガーが混んでいるときに男性が水浴びするくらいだった。

⑤水は溢れる事はなかったが多かったはずなので、地下からクムイ側に流れていたと思う。

⑥カラジアレーガーでは、拝みをやっていたはずだが、ハツキリとはわからない

⑦カーグムヤーグムイを女性は利用していなかった。

⑧カーグムヤーグムイの深さは、馬を浴びせる場所は深くなかったけれど、奥のほうは馬でも泳げたからそうとう深かったと思う。

⑨カーグムヤーグムイの周りは、石で囲まれておらず、土手で木もそんなに生えていなかった。

⑩カーグムヤーグムイの後ろにメーヌウタキ（森）があるが、入口も反対側なのでつながりはなかったと思う。

6. ウブガーの利用や行事

①カーでは洗濯を洗ったり干したりしている間、ユンタクハンタクして帰った。

②子供が生まれた時は、ここから水を汲んでいった。１日に2人子供が生まれた時には、最初に産まれた子をメーヌカーでカーウリーし、後から産まれた子はサクヌカーでカーウリーした。１日に2人はダメだった。

③人が亡くなった時には、ここからアミチョージーの水を汲んできた。だから、普段水を汲みに行った人が遅くな

っても、水は迎えに行くものではないといって、迎えには行かなかった。

④アミチョージーの水を汲みに行く人は、年上の人が誰々行きなさいと決めていて、早く帰ってきなさいよと言われて水を汲みにいった。

⑤正月の朝にはワカミズといって、ウブガーから汲んできた水を沸かしてツィタチウチャトゥーもやった。

⑥男の子供達は親戚の家々に水を持っていき、お年玉をもらっていた。

⑦普段はこのウブガーをメーヌカーと呼んでいた。子供が生まれた時や人が亡くなった時には、ウブガー行ってきなさいといってウブガーと呼んでいた。

⑧カーに水を汲みに行ったりした。自分達（男）はクーテングヮーでしていたけれど、女性はカミティアットウルミジシヤーヤだった。

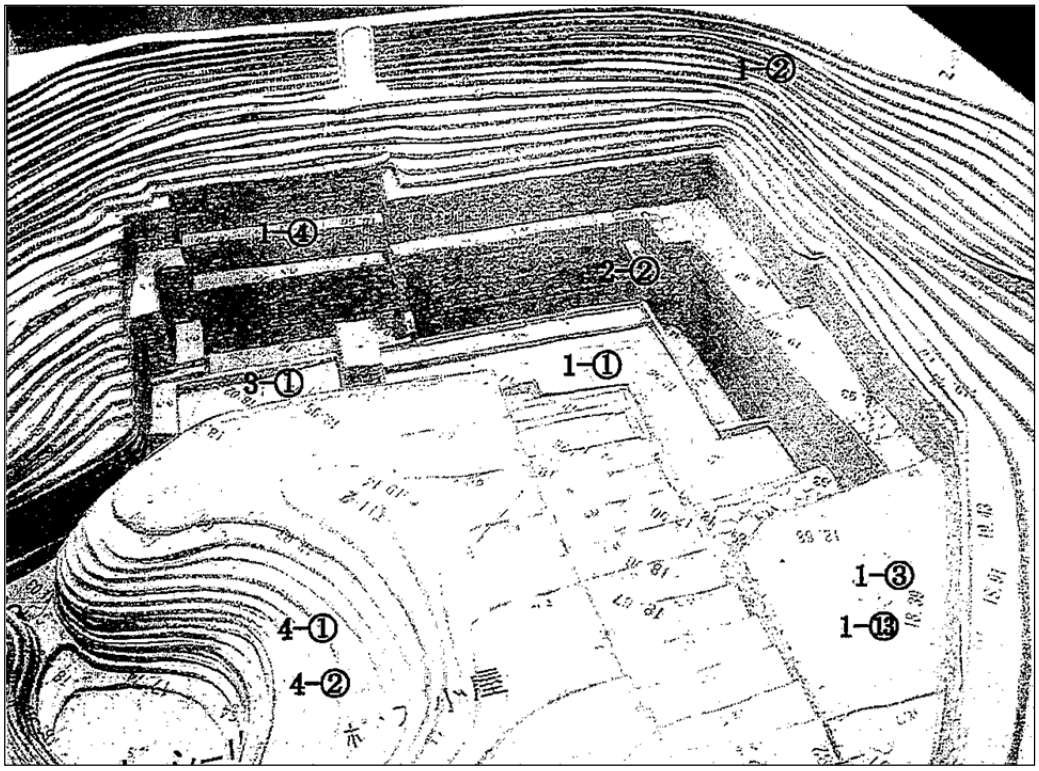
⑨皆が使う水だからといって、水をターグですくったら叩かれたし、貯水桝の縁には上がってはいけないと言われていた。貯水桝の中に入る事もダメだった。

⑩いつやるかは決っていなかったが、年に1度くらいカーサライといって、貯水桝の底に溜まった泥水をだしていた。

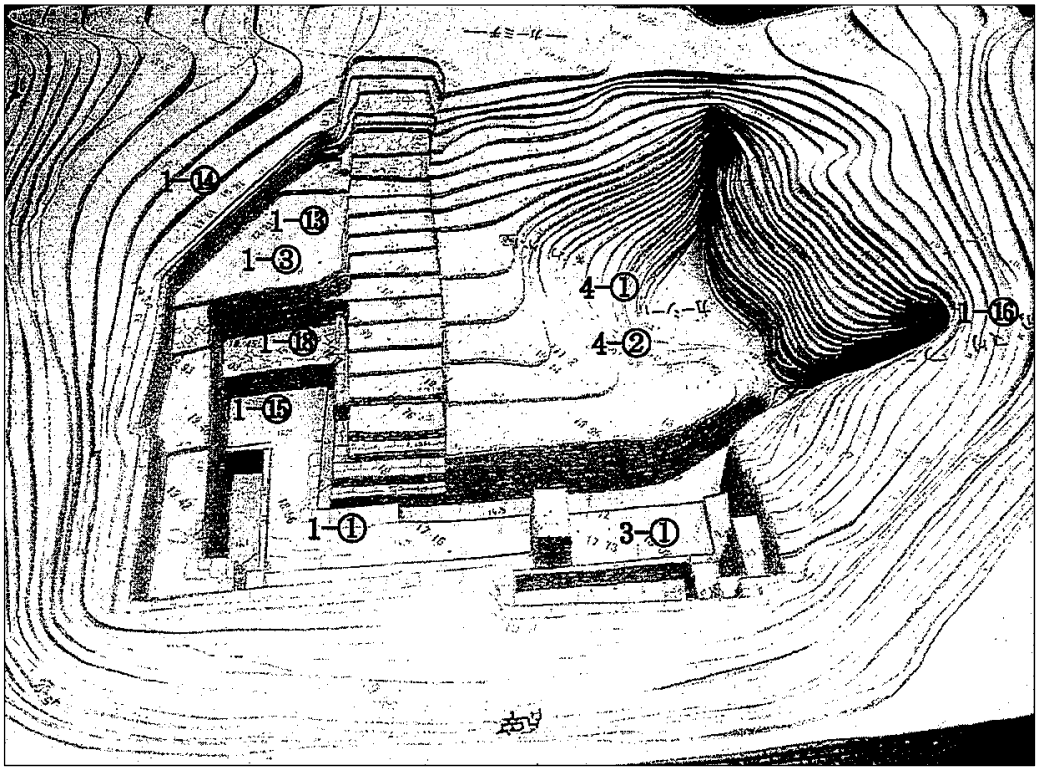
⑪ウブガーやサクヌカーでは、イモクジやオオバ等を洗ったりした。

⑫ウブガーで若い嫁さんが大根の葉っぱを芋の上に蒸して洗いにいったら、あちこちから少しちょうだいといって皆に食べられてしまい、家に帰る頃には 3 分の 1 くらいしかもって帰れなかった。

ウブガー周辺の以前の様子（再現模型）



ウブガー周辺の以前の様子（再現模型）



⑬洗濯物は色々なものを洗っていて、オシメを洗う時は下で洗いなさいと言われていた。

⑭水浴びしたり、洗濯する時間は決まっていなかったが、夜にモーアシビーした帰り、水浴びしたりした。

⑮カーウガミは、渡嘉敷唯得さんが碑文を建ててから始めた。石垣を直した時に、この碑文を建てたが、それ以前のカーウガミはやっておったはずだがわからない。

⑯2月2日のクスクイには、土帝君は拝むけれど、6月 25 日のカーウガミは碑文に向かつて拝みをするので、カーウガミと土帝君とは、関係ないと思う。

7. その他

①カーミチの反対側に、カーグムヤーという大きな池があって、そこで馬を洗ったり家の床板を洗って周りに立てて干していた。昔は床板にクギが打たれておらず、1尺くらいの大きさの、松の木の板だった。

②髪を洗う時には、クチャを石鹸がわりに使いよった。

③昔は髪が長い事が自慢になった。髪の長い人はうらやましがられた。

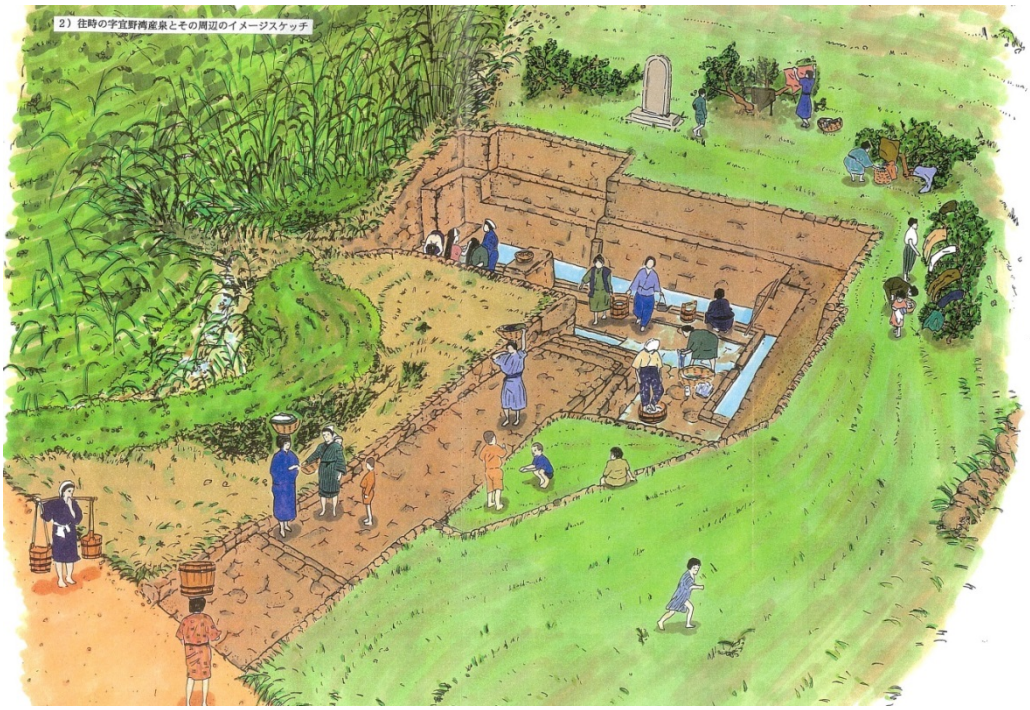
④今のメーヌウタキには、ウスクの木が一本しか生えてないけど、以前は森になっていて、そこから木を切ったら神様にとがめられるといって、そこに入り込んで木を切る人はいなかった。管理は字がやっていた。

⑤カーの上にもウフザトゥヌウタキという御獄があった。普通、部落に御獄は1つしかなく、字宜野湾は2カ所を1つにしたらしくて、メーヌウタキとクシヌウタキがある。それ以前からの御獄をウフザトゥヌウタキと呼んだと思う。

3. 想定図

往時の字宜野湾産泉とその周辺にかけての状況を、前項までの調査分析等の多方面からの情報を整理・検討しながら空間を再構築した結果、右図のような想定図にまとめた。

また、往時の人々の利用状況も描いたイメージスケッチを作成し、次項に示している。



Ⅲ　基本計画

1．計画方針

　現況把握や敷地分析を行なった結果、宇宜野湾産泉とその周辺について以下の保存整備方針を設定した。

1）産泉の復元と保存・活用

①発掘調査に基づいた復元

　戦後直後まで利用されていた産泉は、周辺の普天間基地開発により土砂が流入し、現在埋没した状況にあ

るが、地域住民が日常的に利用していた戦前の状態に戻す事を目指し、改変された地形はできるだけ回復を図る。戦後の簡易水道工事による構造物は撤去し、改変、崩落した石積み等は発掘や聞き取り等調査に基づいて、戦前の形状へ復元・修復を行う。

②湧水の再生

利用されなくなるまで、非常に豊富だったと言われる湧水は、土砂に埋没してからは見えない状況になっている。カーにおいて最も重要なのは湧水であり、土砂の除去と旧地形・石積みの復元と同時に湧水の確認と水量・水質調査を行い、状況に応じて水脈・水源調査と往時の湧水量を取り戻す方策を検討して、湧水を再生する。

③史跡指定

字宜野湾産泉は、ドリーネ地形に形成されたカー（井泉）としては規模も大きく、現在埋没しているものの石積建造物は良好に残っていると考えられる。また、字宜野湾集落の中心的な井泉でもあり、建造物や地理、歴史民俗的にも価値の高い文化財として、史跡指定による保護を目指す。

④利活用

計画案 A・・・文化財の復元と自然環境の保全・回復に重点を置き、施設整備は少。

計画案 B・・・井泉部分のみ復元、他の部分は遊歩道や施設を配置し積極的に活用。

2)ドリーネ全体の保全活用

産泉及び下流側のカーグムヤーグムイは一つの大きな陥没ドリーネと呼ばれる地形に形成されており、井泉からの湧水がカーグムヤーガマに流れ込む間の、水の流れと往時の利用の形態が残されている貴重な場所である。カーミチやカラジアレーガー、戦後ドリーネに形成された緑地等も含め、産泉と一体的な保全と復元、活用を図る。

3）周辺集落環境の保全及び回復と基地跡地利用計画の整合

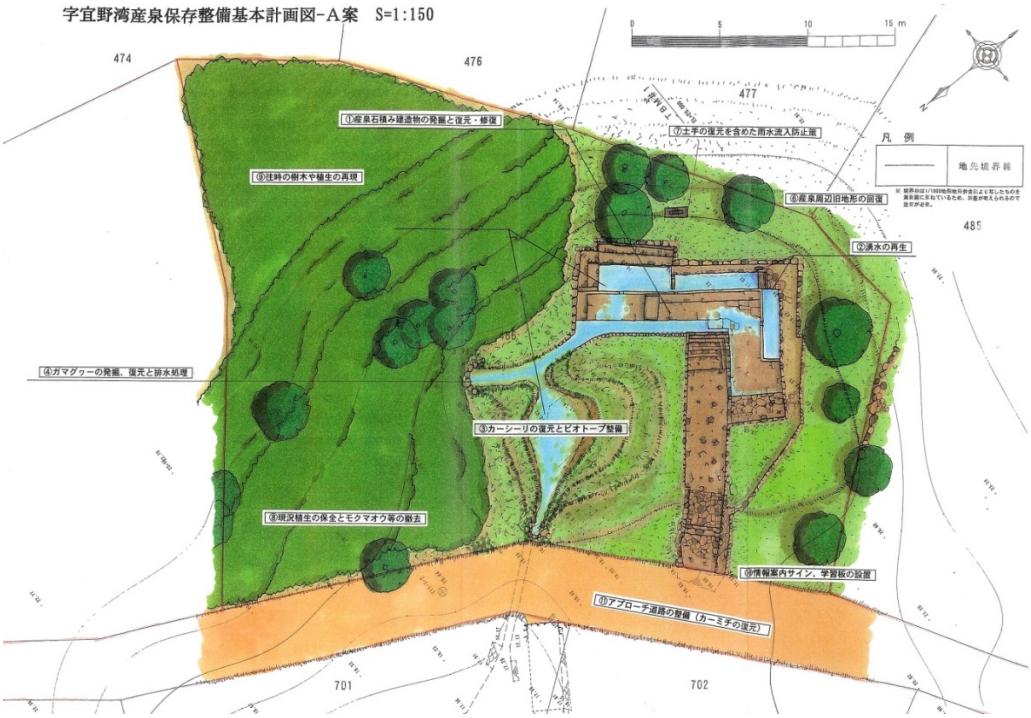
かつてドリーネ周辺は、耕作地とメーヌウタキ（前ヌ御嶽）やウフザトゥヌウタキ（大里ヌ御嶽）等が存在したが、普天間飛行場整備による宇宜野湾集落全体の移動・整地とともに失われ、現在はメーヌウタキの香炉とウスク（アコウ）の木が残るのみである。今後の基地返還に向けて、跡地利用計画と整合を図りながら、産泉周辺の御嶽も含めた範囲を集落環境保全・再生ゾーンとして、かつての景観のあり方を考慮した宇宜野湾のまちづくりの基点（拠点）となるように位置付ける。

2. 字宜野湾産泉の整備計画案

1）字宜野湾産泉保存整備基本計画ーA 案（周辺環境保全・再生案）

周辺の地形や植生を含めた産泉及び周辺の、戦前の形態への復元を基本とする。ただし、湧水の再生や排水処理、危険防止策、カーミチの整備は景観や周辺土地利用を考慮して、土木的工法も活用し、特に水辺は子供たちが安心して気軽に水に触れあえるようにする。カーシーリはビオトープと位置付けて自然学習に活用できる形とする。サインや学習板を設置し、かつての産泉の利用や生活との関わり等、歴史・自然学習に対応できる場所とする。

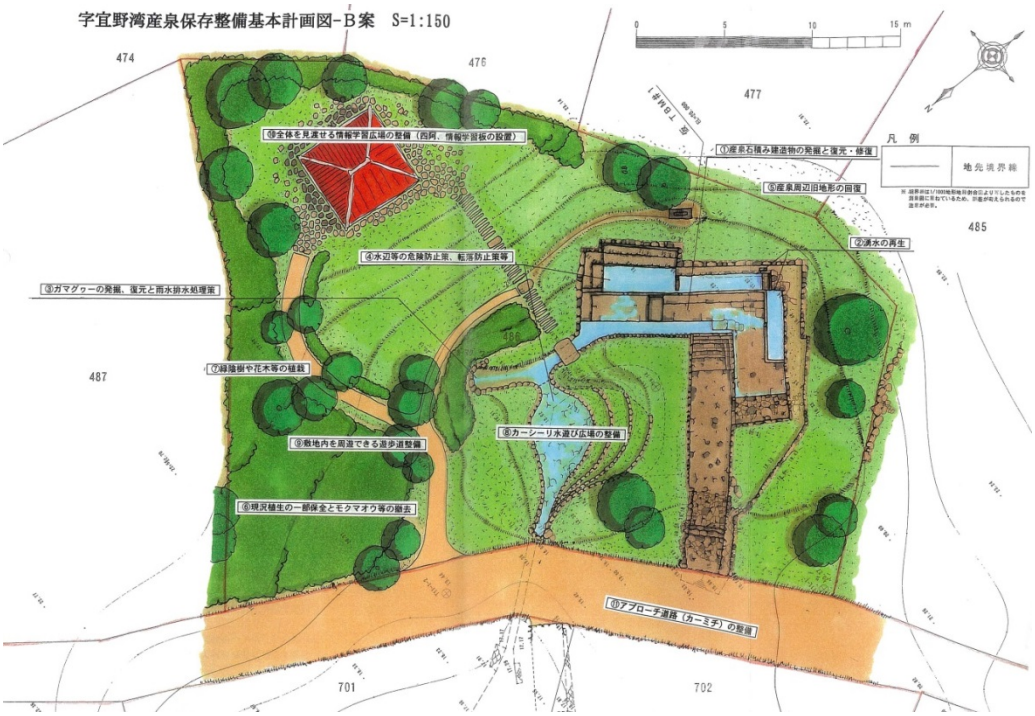
①産泉石積み建造物の発掘と復元・修復
②湧水の再生
③カーシーリの復元とビオトープ整備
④ガマグヮーの発掘、復元と排水処理
⑤水辺等の危険防止策
⑥産泉周辺旧地形の回復
⑦土手の復元を含めた雨水流入防止策
⑧現況植生の保全とモクマオウ等の撤去
⑨往時の樹木や植生の再現
⑩情報案内サイン、学習板の設置
⑪アプローチ道路の整備（カーミチの復元）



2）宇宜野湾産泉保存整備基本計画ーB 案（周辺活用・整備案）

基本的に産泉は戦前の形態への復元を行う。ただし、湧水の再生や排水処理、危険防止策、カーミチの整備は景観や周辺土地利用を考慮しながら土木的施設も活用し、特に水辺は子供たちが安心して気軽に水に触れあえるようにする。カーシーリ付近は子供たちが水遊びできる小広場として水底も舗装を施し、ベンチ代わりとなる段状の石積等を設置する。敷地西側の平坦部には四阿を設置し、かつての産泉の利用や生活との関わり、歴史等が分かるような情報学習と休憩もできる広場として、産泉が見渡せるように斜面側は芝生を基本とする。産泉や碑、各広場を周遊できるように遊歩道を整備し、緑陰樹や彩りのある花木を適宜配置する。

①産泉石積み建造物の発掘と復元・修復
②湧水の再生
③ガマグヮーの発掘、復元と雨水排水処理策
④水辺等の危険防止策、転落防止策等
⑤産泉周辺旧地形の回復
⑥現況植生の一部保全とモクマオウ等の撤去
⑦緑陰樹木や花木等の植栽
⑧カーシーリ水遊び広場の整備
⑨敷地内を周遊できる遊歩道整備
⑩全体を見渡せる情報学習広場の整備（四阿、情報学習板の設置）
⑪アプローチ道路（カーミチ）の整備



Ⅳ　今後の課題

1. 普天間基地跡地利用計画等との連携

産泉及び下流側のカーグムヤーグムイを含むドリーネは、歴史民俗的にも地形地質的にも非常に貴重な場所であり、一体的な保全と復元、活用が望まれる。また、周辺にも御嶽等のかつての集落環境において重要な場所が存在している。

一方、県や市では今後の基地返還に向けて、跡地利用計画や都市計画マスタープラン等の作成が進行しているが、文言による文化財等のおおまかな位置づけはあるものの、産泉等といった文化財個別の細かい位置づけは現投階で示されていない。特に産泉は現段階の道路計画でいくと周辺造成の影響が懸念される位置にある。

出来るだけ早い段階でこれら上位計画との連携・整合を図りながら、産泉及び周辺環境の保全と、かつての集落環境を思慮に入れた周辺景観づくり、宇宜野湾のまちづくりへ繋げていく事が大きな課題となる。

2. 文化財の指定

宇宜野湾集落の中心的な井泉でもある産泉は、建造物や地理、歴史民俗的にも価値の高い文化財として、基地返還後の保存整備に向けて、文化財指定による保護が望まれる。可能な限りカーグムヤーグムイ側を含めたドリーネ全体を文化財指定する方向で保全活用を図っていく事が最も望ましい。

3. 産泉石積みの発掘と復元

埋没して年数が経った状況にある産泉は、発掘し流入した土砂を除去した段階で、元の石積みが崩落・倒壊する可能性も考えられるため、これらに留意して作業を行なう必要がある。場合によっては石積みの土木的な補強などが復元時の課題となる。

4. 湧水の再生と水質

現在、カーグムヤーガマ付近では油臭がしており、洞穴内部からの臭気と思われる。このことから、洞穴内を始め周辺の地下には普天間基地内からの何らかの物質が流入している可能性が高く、地下水にも影響を与えていることが考えられる。湧水を再生し利活用を図る上で、これらの調査を行ない、水量と同時に安全な水質を取り戻す方策が今後の課題となる。

5. 管理運営と利活用プログラム

産泉の復元整備後は、歴史・自然学習の場としてや、地元や市民の憩いの場として、積極的に活用されていく事が重要であり、管理の強化や、教育委員会との連係などによる利活用プログラムの作成、他の文化財・学校や公民館・その他文化施設等とのネットワークづくりが必要である。

また、整備に先駆けて地元の勉強会や子供たちの見学会、他地域の整備事例調査等も地元や市民への啓蒙や今後の人材育成などの点で重要である。

6. 整備手法

宇宜野湾産泉及び周辺を整備していく上で、文化庁もしくは他省庁等のさまざまの補助事業の導入が必要になると考えられる。事業の導入においては他事業や市、県の各関連部署との充分な調整や連係が今後の課題となるであろう。

7. 整備範囲と用地

産泉の周辺も含めて整備していく上で、周囲には個人有地などの字が管理していない土地も少なくないため、計画を進めていく段階での用地購入と整備範囲といった事が、文化財指定する場合の指定範囲などと絡んで今後の検討課題となると思われる。

出典:「ぎのわん　宇宜野湾郷友会誌」、昭和 63 年6月、宇宜野湾郷友会

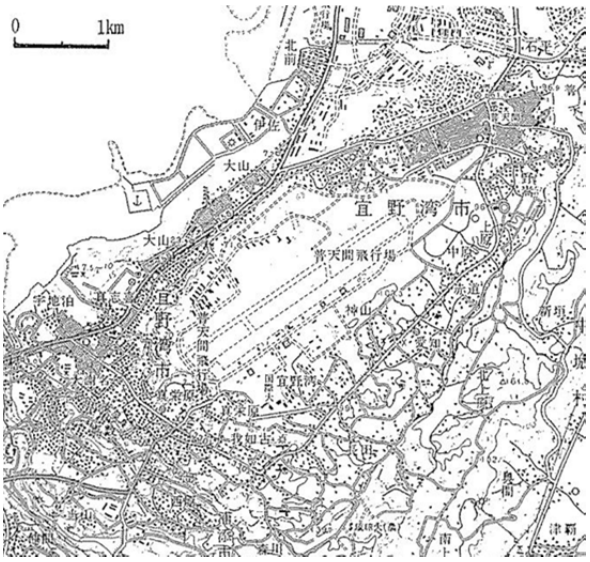
第一章　宜野湾の自然

第一節　気候・地質・地形

宇宜野湾は、宜野湾市のほぼ中央に位置し、北を字神山、東を字愛知と長田、南を字志真志と佐真下、西を字大山に接している(第１図参照)。宇宜野湾の東側、前田原にある公民館は、東経一二七度四五分五〇秒、北緯二六度一五分三九秒、標高一〇一・一メートルに位置する。

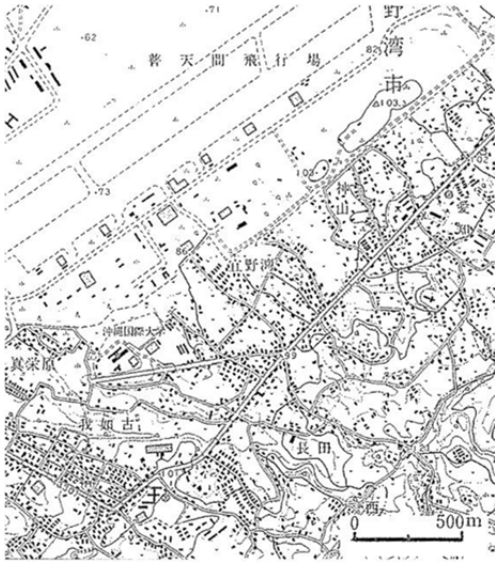
地形的に字宜野湾は、海岸段丘中位面の七〇から一〇〇メートル付近に広がっている。宇宜野湾の最高所は、公民館の北に隣接する、標高一〇六・八メートルの、土帝君を祭る小さな丘である。

字宜野湾の面積は、約一・四平方キロメートル(宜野湾市役所作製の縮尺二万分の一地図より測定)で、宜野湾市の総面積一八・六平方キロメートルの約七・五パーセントを占める。



第1図　字宜野湾の位置

(1980 年修正測量 5 万分の 1 地形図「那覇」、「沖縄市南部」図幅)



宇宜野湾の新旧の比較

(左)1919 年(大正 8)測量 2 万 5 千分の 1 地形図「泡瀬」図幅

(右)1978 年(昭和 53)修正測量 2 万 5 千分の 1 地図「沖縄市南部」図幅

一　気　候

1　亜熱帯気候

宇宜野湾の気候の概略は、宇宜野湾の南西方約八キロメートルの、那覇市上之屋にある沖縄気象台（東経一二七度四一分、北緯二六度一四分、標高三四・八メートル）の気象観測資料によって説明される（第 1 表第 2 図参照）。

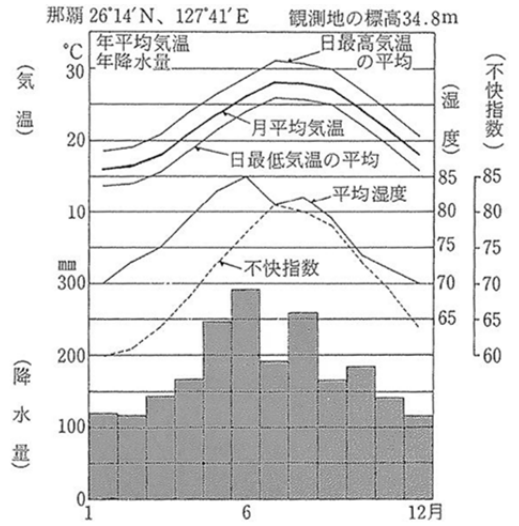
沖縄は、亜熱帯気候地域であるとよくいわれる。亜熱帯とは、熱帯と温帯の中間地帯であり、緯度的に南北緯二五度から三〇度付近までの範囲を指す（日本地誌研究所、地理学辞典、一九七三）。九州の南から台湾まで、約一二〇〇キロメートルにわたって連なる琉球列島を構成する一四〇余りの島々は、およそ北緯二四度から三一度の範囲に分布している。いっぽう、亜熱帯気候の定義にはいろいろあるが、世界の植生分布の特徴から世界の気候区分を行なったドイツの気候学者ケッペン（一八四六ー一九四〇）は、亜熱帯気候を月平均気温二〇度以上の月が四ヵ月から十一ヵ月、同時に二〇度以下の月が一ヵ月から八ヵ月ある場合とした。那覇における月平均気温二〇度以上は、四月から十一までの八ヵ月、二〇度以下の月は十二月から翌年三月までの四ヵ月である。このように琉球列島を構成する島々の緯度的な分布範囲とケッペンの気候学的定義から、沖縄県は亜熱帯気候地域といえよう。なお、ケッペンの気候区分によると、那覇は夏（最暖月）の月平均気温が二二度を越える温帯多雨気候（Cfa）に属する。

第1表　那覇の気候

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計期間
月平均気温℃	16.0	16.4	18.0	21.0	23.7	26.1	28.1	27.8	27.1	24.3	21.3	18.1	22.4	1951～1980
日最高気温の平均℃	18.6	19.1	20.9	23.9	26.5	28.8	31.0	30.6	29.9	27.0	24.0	20.7	25.1	1952～1980
日最低気温の平均℃	13.7	13.9	15.6	18.6	21.5	24.1	25.9	25.6	24.9	22.0	19.1	15.8	20.1	1952～1980
降水量 mm	119.8	117.9	143.9	168.1	248.9	292.6	162.6	260.1	166.4	186.2	141.7	116.5	2148.2	1951～1980
月平均湿度%	70	73	75	79	83	85	81	82	79	74	72	70	77	1952～1980
月平均風速m/秒	4.3	4.6	4.3	4.3	4.4	4.8	4.4	4.7	3.9	4.7	5.3	4.5	4.5	1975～1980
最多風向	北	北	北	南南西	南南西	南南西	南	東	東	東	北東	北東	北東	1954～1980
不快指数	60	61	64	68	73	77	81	80	78	73	69	64	70	

沖縄気象台「那覇の気候略表」より上原作製。不快指数は、木崎甲子郎編著（1980）「琉球の自然史」による。

2　蒸し暑い夏と寒い冬



第2図　那覇の気候図

沖縄気象台（1980）「那覇の気候略表」より上原作製。なお不快指数は、木崎甲子郎編著（1980）:「琉球の自然史」による。不快指数は、75 以上「やや暑い」、80 以上「暑くて汗が出る」、85 以上「暑くてたまらない」。

那覇の年平均気温は二二・四度である。冬の月平均気温が最も低いのは、一月の一六・〇度である。この値は、ケッペンが熱帯気候の定義にした「最寒月の月平均気温一八度以上」と比較して余り差はない。いっぽ

う、夏の最も高い月平均気温は七月の二八・一度である。したがって一月と七月の月平均気温の年較差は、一二・七度しかない。

夏と冬の気温と湿度の特徴をみると、夏には日最高気温が三〇度を越える熱帯日と、日最低気温が二五度以上の熱帯夜は、五月から十月の六ヵ月にわたり七〇日以上も出現する。月平均湿度もこの期間には、七五パーセントを越える。特に五月から六月の梅雨期にも高く、九〇パーセントを越えることもある。また、夏の夜の湿度は八五パーセント以上にも達し、熱帯夜と相まって不快指数も七〇から八〇を越え、とても寝苦しい。なお那覇における最高気温は、一九八〇年八月十七日三四・〇度が記録されている。

冬は最も平均気温の低い月でも一月の一六・〇度と比較的温暖である。特に移動性高気圧に覆われた日には、日中の気温が二〇度を越えることもある。しかし、しばしば襲来する寒波と大陸高気圧から吹き出す強い季節風は、温暖な冬に意外な寒さをもたらす。これまでに記録された最低気温は、一九四七年二月二四日と一九六七年一月十六日の六・七度である。冬の湿度は、大陸高気圧の縁に位置することが多く、曇りや雨の日が続くにもかかわらず、七五パーセント以下と比較的乾燥している。

3　多雨地域とヒャーイ（干ばつ）

沖縄各地の年降水量は、一般に一八〇〇から二五〇〇ミリの値を示し、那覇では二一二八ミリもある。那覇では各月とも一〇〇ミリ以上の降水があり、七月を除き五月から八月には二〇〇ミリを越える。特に梅雨期の二カ月ほどで降る雨は年降水量の二五パーセントを占める。

一年間の降水量の変化をみると、冬には、二〇〇ミリを下回る。三月から四月には南寄りの暑く湿った風が吹き出すと降水量は増えはじめる。五月初旬から六月下旬にかけての梅雨期（小満芒種（スーマンボースー））には、三〇〇ミリを越え、一年で最も降水量が多い。梅雨が明けると夏至南風（カーチーベエー（夏の南からの東寄りの季節風））が吹き、七月は好天が続き、降水量も二〇〇ミリを下回る。八月になると台風の接近が多くなり、再び二〇〇ミリを越えるが、九月から再び減りはじめる。しかし、ほぼ数年に一度の割合いで、梅雨期に平年を下回る降水量であったり、台風の接近が少ないことがあり、そのような年には、夏から秋にかけて、ヒャーイ（干ばつ）に見舞われる。したがって、宇宜野湾をはじめさんご礁起源の小さな島々の多い沖縄では、夏の水不足を補ってくれるのは、台風のもたらす大量の雨である。なお宇宜野湾では、干ばつ年をヒャーイドゥシとよぶ。

4　強風と屋敷林

沖縄では十月初旬から中旬にかけて、ミーニシ（新北風）とよばれる北寄りの季節風が吹きはじめる。冬の季節風は翌年の三月ごろまで卓越し、月平均風速は毎秒四メートルを越える。沖縄の冬の気温はそれほど低くないにもかかわらず寒く感じるのは、この強い季節風のためである。三月初旬から下旬にかけて、毎日のように風向きが急変し、ときには突風をともなう旧暦のニングヮチカジマーイ（二月風回り）とよばれる期間がある。

ニングヮチカジマーイが過ぎると風は南西、あるいは南寄りに変わる。四月から梅雨入り前の五月初旬までは、ワカナチ（若夏）とよばれ、比較的さわやかな天候が続く。この頃の風にはもう寒さは感じられない。梅雨が明けると南から南東寄りの季節風、カーチーベェー（夏至南風）が卓越し、蒸し暑さの本格的な夏となる。しかし、夏の季節風も毎秒四メートル以上の月平均風速を示すので、木かげではとても涼しい。八月には台風の接近が多くなり、那覇では台風にともない一九四九年六月三〇日に東北東の最大風速毎秒四九・五メートル、一九五六年九月八日に南から毎秒七三・六メートルの最大瞬間風速が記録されている。

このように那覇では、一年を通してさまざまな方向からさまざまな風が吹くが、なかでも台風の猛烈な風と冬

の季節風は重要である。人々は台風から生命財産を守り、冷たい北風から冬の暖かい生活を確保するために集落に木を植えて防風林を育ててきた。戦前の字宜野湾には、集落を囲むように琉球松の抱護林が残っていた。しかし、戦争中に伐採されたり、戦後の集落移動にともない失われてしまった。いっぽう、戦前は各家の周囲にもいろいろな樹種からなる屋敷林があった。樹種はガジュマルが最も多く、アカギと緑肥にも使用されたユーナーがそれに次いで多かった。沖縄各地で普通に見られる福木もあったが小さかった。しかし徳山家と前又吉家だけは福木の大木に囲まれていた。現在の字宜野湾には、気密性の高いアルミサッシのガラス窓を備えたコンクリートブロック造りの、耐風性の家屋が多いせいか、戦前のような風に対する屋敷林はみられない。

5 字宜野湾の気候伝承

現代の科学的な気象観測技術のなかった時代には、それぞれの土地で生活していた人々は、自分達の周囲に展開する自然環境の中から、さまざまな変化を見いだし、それを積み重ねて、それぞれの土地の気象や気候を認識してきた。すなわち、人々にはいろいろな方向から吹く風や、空の雲の動き、空の色の変化、動物の異常な行勤と植物の変化などは、日々の天気や一年の気候を占うための欠くことのできない重要な、生活の自然的基礎であった。人々はそれらを積み重ね、継承しつつ、さまざまな土地における生活のリズムを作り出してきたともいえよう。字宜野湾の人々にも、字宜野湾の土地に展開する自然現象の変化から、台風や一日の天気の予測などを行なった多くの気候伝承がある。

①アガリ ヌ ウミ ヌ ナイネェー カジ フチュン（東の海が鳴ると台風になる）

これは東方の海、すなわち字宜野湾からは見ることのできない、中城湾の沖合いに広がるさんご礁に砕ける波の音が、東風に乗る遠い海鳴りとなって聞こえると台風（風吹（カジフチ））が襲来するという意味である。この海鳴りが聞こえると、ほぼ間違いなく台風が襲った。そこで字宜野湾の人々は、

②アガリ ヌ ウミ ヌ ナイネエー チチ カンダ シコーリ （東の海が鳴ると、芋のかずらで作った縄を用意しなさい）と言って、台風対策に取り掛かった。小さな島でありながら、海と隔てられたアギに住む字宜野湾の人々にも、海を通して台風襲来を予知したのである。しかし、現代のように自動車や航空機などの氾濫する時代では、東から海鳴りは聞こえないという。

③トラウー ヌ ファー カラ ウフカジ ヤ フチュン（寅卯（トラウー）の方角から大風は吹く）

台風の猛烈な風は、東北東から東南東、すなわち寅卯の方向から吹くことが多い。北半球では、台風は左り回りに渦巻きながら進む。そのため進行方向の右側と左側では、風の強さが異なる。進行方向の右側では、台風の移動速度と渦巻き状に流れる空気の速度があわさって、風は強くなる。逆に左側では、進行方向と空気の流れの向きが正反対になるので、風は右側に比べて弱くなる。そこで、台風の進行方向に対して右側を「危険半円」、左側を「可航半円」とよぶ。したがって、台風が字宜野湾の南から西方にあるときには、字宜野湾は台風の「危険半円」に位置することになり、トラウー ヌ ファー から大風が吹くのである。

④アカチチ アケー ヤ アミ、 ユーサンディ アケー ヤ カジフチ （朝焼けは雨、夕方に空一面が赤くなると台風が来る）

これは、朝焼けがきれいだとその日の天気は雨模様だが、夕方に空が赤く染まると台風が襲来するとの意味である。確かに台風が来る一、二日ほど前の夕方には、普通の夕焼けとは異なり、空全体がピンク色に染まることは、各地で経験されることである。

⑤台風の来る前には、カジフチ ダーマ（ホソミシオカラトンボ）が飛ぶ

九月、十月には、台風の接近が多い。そのころは赤とんぼの季節でもあり、台風の蒸し暑い風が吹くようになると、カジフチダーマが群れをなして低く飛び交うのがしばしばみられる。

⑥カーチーベェー　ヌ　クンドー　マギサクトゥ　ウーカジ　ヤ　ネェーン　サ　（夏至南風（カーチーベェー）が今年は強いので、強い台風は来ない）

小満芒種（スーマンボースー（梅雨期））が過ぎると、夏の季節風である南から南東寄りの夏至南風が吹きはじめる。この夏至南風の強さと台風の発生、あるいは接近とのあいだには、どのような関係があるのだろう。興味深いことである。

⑦ナージチュー　ヌ　フシ　ヌ　ウフサイネェー　イククェーン　フチュン　（ハイキビの節の数が多いと襲来する台風も多い）

ハイキビの節の数の多少によって、その年の台風の数を占うのである。いったい両者には、どのような関係があるのだろうか。興味のあることには、全く同じ伝承が伊平屋島でも知られている（琉大地理、一五号一九八一）。

⑧蜂が樹上高くに巣を作る年には台風は少なく、低いところに巣を作る年には台風は多い

動物は自然環境の変化に敏感であるといわれる。例えば、クモは雨が降る前に巣網を縦に張り、風が強いと水平に張るという。蜂も一年の天候を予測して、卵を産み子を育てる大切な巣をどこに作ればよいかと考えるのだろう。しかし、蜂が樹上高くに巣を作ったにもかかわらず、台風が襲来した年もあったという。

⑨ミーニシが吹くと台風は来ない

北東季節風であるミーニシが吹く十月ごろには、大陸高気圧が勢力を増し、西高東低の冬型の気圧配置ができあがるので、台風の発生も少なく、沖縄地方へ接近することもほとんどない。

⑩イリ　ヌ　ウミ　ヌ　アリーネェ　アミ　フュン　（西方の海が荒れると雨が降る）

⑪那覇の方向（字宜野湾の南西方）から風が吹くと雨が降る

この二つは、おそらく沖縄本島北方海上を西から東へ低気圧が通過する場合のことであると考えられる。そのようなときには、字宜野湾では西から南西寄りの風が吹き、西方に見える東シナ海は荒れ、雨の降ることが多いのだろう。

⑫フユ　フェー　マーイ　ヤ、トゥナイ　マーイヤ　スナ　（冬に北から南に風向きが変わると、隣近所を訪問するのはやめなさい）

これも、前の二つと同様に低気圧の通過とそれにともなう寒冷前線の接近に関係があると考えられる。このようなフユ　ヌ　フェー　マーイ　の日には雨が降るので、洗濯物やタムン（薪）、それに大切な製糖用の燃料であるバカスを濡らすことのないよう油断せず、あちらこちらと出歩くなと戒めた。

⑬十月（旧暦）に台風が来ると餓死

⑭冬にアラレが多いと餓死

旧暦の十月ごろには、冬型の気圧配置が安定し風の接近は極めて少ない。もし、台風が襲来して農作物が多くの被害を受けると、夏のようにすみやかに回復するのは困難である。そのため芋などの食料の確保に難渋した。また、冬に降るアラレは芋の葉を痛めて枯らしてしまうので、芋が育たず、食料に不足をきたした。

次に、短い冬の期間に襲来する寒波のいくつかをあげてみるが、ほとんど沖縄各地に共通するものである。

①トゥンジー　ビーサ（冬至寒さ）

十二月二二、二三日の冬至のころの最も早い寒さである。このころから多くの家庭では暖房を始める。

②ムーチー　ビーサ

甘い月桃（げつとう）の香りとともに来襲する。旧暦の十二月八日ムーチーのころの寒波である。

③ウヮー　クルサー　ビーサ

字宜野湾では、旧暦の十二月二七日にお正月（旧正月）用の豚をと殺した。そのころの寒波。

④ハル　ヌ　シチ　ビーサ

年も明けて、立春のころの寒波で、最も寒い。

⑤ウシー　ビーサ（雨水寒さ）

立春を過ぎ、新暦の二月十八日ごろの、二四季節の一つである雨水前後の寒波。雨水は大豆の種播きの目安であった。

二　地　質

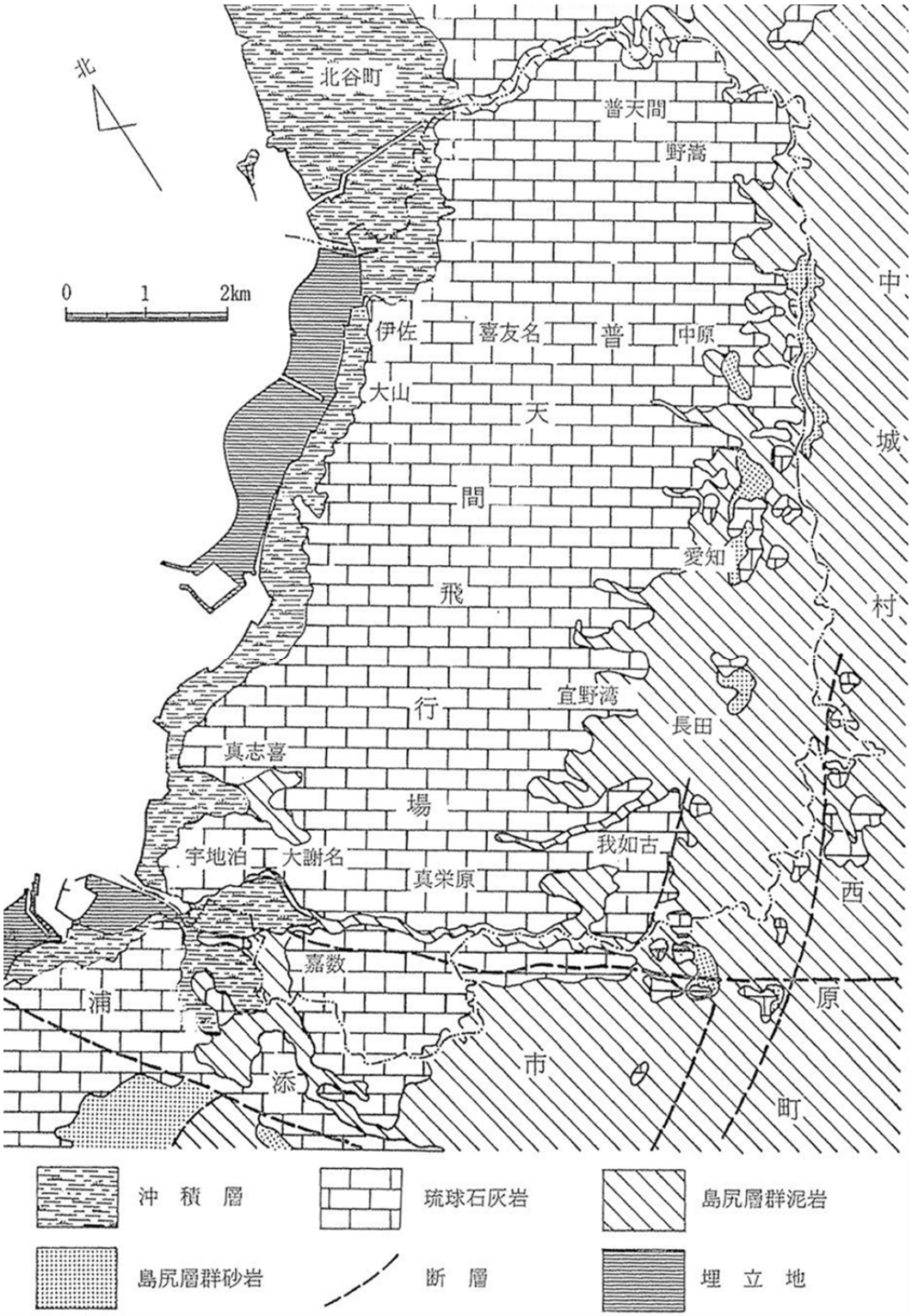
字宜野湾を含める沖縄本島の中南部は地質構造的に、琉球列島と並行するいくつかの帯状構造のうちの、太平洋側に位置する新第三系の砂岩（ニービ）と泥岩（クチャ）の厚い地層で特徴づけられる島尻累帯に属している（小西、一九六五）。このことから、字宜野湾や周辺の地質は新第三紀中新生末期から鮮新世末に堆積したと考えられている島尻層群の砂岩と泥岩を基盤として、それを不整合に覆う第四紀更新世のさんご礁に由来する琉球石灰岩、完新世の沖積層の新しい地層から構成されている（第3図参照）。

島尻層群は青灰色の泥岩を主体として、黄褐色の砂岩や凝灰岩などをはさみ、おもに我如古から野嵩に至る国道三三〇号線に沿う宜野湾市東部の、標高七〇メートルから一三〇メートル付近に分布している。さらに普天間川や志真志川、比屋良川の下流の峡谷付近と、伊佐から嘉数にかけての東シナ海に面する海岸に近い岸と急傾斜地にも琉球石灰岩と明瞭な不整合関係を示して露出する。なお、その不整合面には多くの湧水がみられる。

琉球石灰岩は、おもに島尻層群の露出する国道三三〇号線より西側に広く分布し、標高一〇〇メートルから一〇メートル付近にかけて、東シナ海側に階段状に低下する中位および下位の海成（海岸）段丘を形成している。また、宜野湾市東部の島尻層群の分布地域にも、標高一三〇メートル付近にまで、琉球石灰岩が点在している。

沖積層は未団結の粘土や砂礫からなり、宜野湾市西部の伊佐から宇地泊に至る、標高五メートル以下の海岸に沿う低地に広く分布するほか、内陸の丘陵や台地を刻む浅い谷の低地にも見られる。

字宜野湾の地質をみると、字宜野湾のおよそ三分の一にあたる東側の前田原と薄倉原、山川原には、島尻層群の泥岩が露出する。公民館の北側にある、土帝君を祭る標高一〇六・八メートルの小さな丘には、泥岩の露頭がみられる。琉球石灰岩は後原と前田原、薄倉原、山川原の普天間飛行場沿いから、飛行場内の下原、大嶺原、宜野湾原、東原、馬場下原、大吹原の、字宜野湾の三分の一を占める地域に分布する。沖積層は長田方面から前田原を通り、宜野湾原のメーンサクガマに続く、小さく浅い谷にわずかに認められる。



第3図　宜野湾および周辺の地質図

〔Flint. Etal, (1959)に加筆・修正を加え上原作製〕

三　地　形

字宜野湾と周辺の地形の特徴は、沖縄本島北部のように古い岩石（古第三紀～古世代）からなる高い山地がなく、新しい地層の低い丘陵と台地が卓越することである（第4図参照）。

琉球列島の島々は成因や地質、さらに地形的な特徴から、高い山地とそれを取り巻く、起伏の大きい丘陵や台地の存在する高島と、山地がなく、低起伏の丘陵と台地からなる低島に分類された（目崎、一九七七）。それによると沖縄本島は、石川と恩納村仲泊を結ぶ約四キロメートルの地境を境に、北部は高島、中南部は低島に区分される。したがって、宇宜野湾と周辺の地形は、山地がなく、島尻層群のつくる低い丘陵と琉球石灰岩の台地（海岸段丘）の卓越する、低島の特徴を有する。また、海岸沿いには、広い海岸低地が存在する。さらに、琉球石灰岩の台地には、琉球石灰岩が炭酸ガス（CO^2）を含む水に溶かされる課程において生じるカルスト地形も数多く形成されている。

土壌は気候、地質、地形などと関連して、ジャーガル、島尻マーヂ、沖積土壌などが分布する。

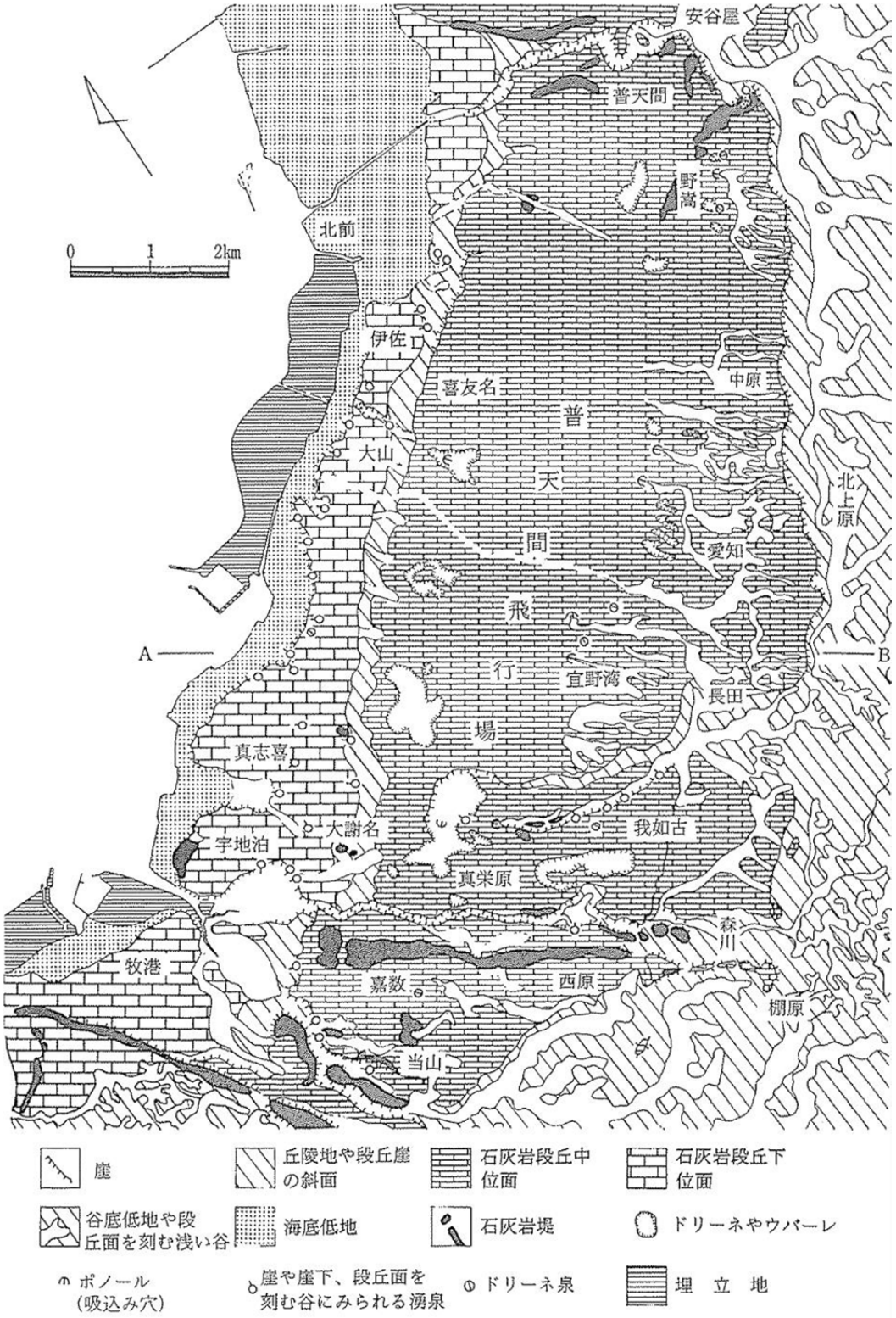
1　丘陵

丘陵は宜野湾史南部の長田や志真志、我如古付近と、宜野湾市の東側を北流する普天間川以東に分布する。丘陵をつくる地層はおもに島尻層群の泥岩であり、比較的なだらかな斜面の連続する波浪状の地形を呈する。丘陵には、ところによって砂岩の露出する地域もあるが、泥岩に比べると急傾斜面を形成することが多い。丘陵の頂部と周辺の谷底低地との比高は、いっぱんに一〇～二〇メートルほどであるが、五〇メートル以上に達することもある。

丘陵の頂部には、琉球石灰岩がメサ（琉球石灰岩のような硬い岩石が、泥岩などの抵抗の小さい岩石の上に重なっている場合に形成される、周囲の一部を急崖で囲まれている地形）やビュート（メサが開析され、頂面が小さく孤立丘となったもの）のように存在することが多い。このことから、丘陵の成因は、かつて島尻層群を広く覆っていた琉球石灰岩が侵食によって除去された後に、露出した泥岩や砂岩が風化侵食されて形成されたものと考えられる。

丘陵に分布する土壌は、丘陵をつくる島尻層群の風化によって形成され、とくに泥岩を母材とする灰色の土壌はジャーガルとよばれる。ジャーガルは微アルカリ性の肥沃な土壌である。母岩の泥岩は粘土質で軟かく容易に破砕できることや大気にさらされると急速に風化され細粒化すること、微アルカリ性を示すことから最近では、土壌の改良のために客土されて農業の生産性向上に大きな力を発揮している。ジャーガルの色はいっぱんに灰色であるが、我如古から赤道にかけての丘陵の頂部では赤色化しているのが観察される。赤色化した部分と泥岩との境界は明瞭であるが、ところによっては灰色（泥岩）→白色→赤色と漸移することもある。この赤色化したジャーガルと砂岩の風化土壌は、沖縄本島北部に分布する国頭マーヂと同じものとされている（国土庁土地局、一九七七）。

宇宜野湾では、丘陵は土帝君を祭る小丘であり、（第4図地形分類図では規模が小さいので海成段丘に含めた）、灰色のジャーガルが分布する。



第4図　宇宜野湾および周辺の地形分類図

〔空中写真などから上原作製。人口改変地は無視。湧泉の分布は実地調査と宜野湾市教育委員会（1982）：宜野湾市文化財調査報告書第 4 集による〕

2 海成(海岸)段丘

海成段丘は普天間川以西の東シナ海側に広く分布する。宜野湾市は一部の丘陵地を除くと、ほとんど海成段丘上に位置する。段丘を構成する地層はおもに琉球石灰岩であるが、国道三三〇号線付近から西側には琉球石灰岩を載せて小さく起伏する島尻層群の泥岩と砂岩からなる。

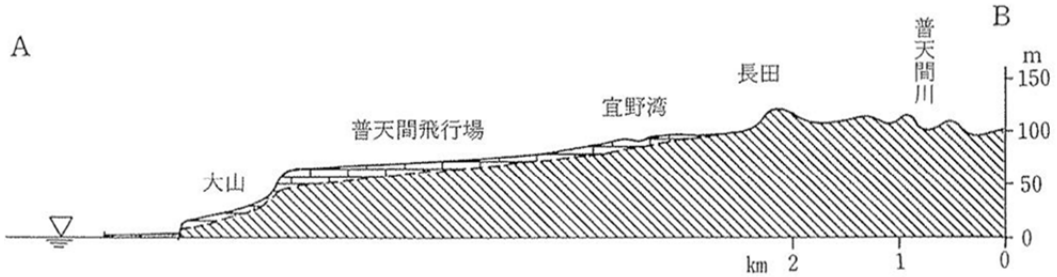
字宜野湾と周辺の段丘は高度と地形から中位面と下位面に区分される。(第4、5図参照)。中位面は六〇から一三〇メートル付近にかけて分布しており、六〇～八〇メートル面と一〇〇～一三〇メートル面の二段ほどに分けられる。中位面と下位面との間には、三〇メートルほどの比高を持つ段丘崖が存在する。下位面は標高五メートル以下の沖積面と国道五八号線に沿う一〇～三〇メートル面の二段に分けられる。

中位面は六〇～八〇メートル面が最も広く、宇宜野湾の下原、大嶺原、馬場下原、大吹原と普天間飛行場が位置する。琉球石灰岩からなるこの面はゆるやかに起伏し、ドリーネやウバーレ、洞穴などのカルスト地形が数多く形成されている。この面と東側の一〇〇～一三〇メートル面との間には段丘崖に相当する傾斜地があり、後原と宜野湾原・前原の一部が位置する。一〇〇～一三〇メートル面は多くの浅い谷によって開析されており、島尻層群が広く分布し、琉球石灰岩は断片的に存在する。この面を開析する谷は、いっぱんに南東から北西方向に伸びており、流水は途中からポノール(吸込み穴)に入り、洞穴の中を流れる地下川となる。宇宜野湾のメーンサクガマ(写真1参照)と国吉ヌメーヌガマはその典型的な例である。なお後原と前田原、宜野湾原の一部、東原、薄倉原、山川原、前原の一部は一〇〇～一三〇メートル面に位置する。

下位面の一〇～三〇メートル面は琉球石灰岩で構成されており、海岸に向かいゆるく傾斜する。面は、急な谷壁をもつ小さな谷に一部で切られ、また小さなドリーネもいくつか形成されている。沖積面はおもに海岸低地であり、海や陸から供給された粘土や砂礫からなる。沖積面と一〇～三〇メートル面の境は、比高が五メートルほどの崖や急斜面となっており、一〇～三〇メートル面を構成する琉球石灰岩と基盤の島尻層群からの不整合露頭がみられる。この不整合面からは、多くの地下水が湧出し、大山付近では沖積面は低湿となり、田芋栽培の盛んな水田地帯が展開してくる。

段丘面を構成する琉球石灰岩の起源は、更新世のさんご礁である。この大昔のさんご礁が土地の隆起や氷河期の海面の低下など、断続的に離水して階段状の地形となったのである。

段丘面上には、母岩の違いによって二種類の土壌が分布する。一〇〇～一三〇メートル面には島尻層群泥岩の露出が広いので、丘陵地域と同じ灰色のジャーガルがおもに分布する。この面上においても、ジャーガルは丘陵頂部と同様に赤色化していることもある。いっぽう、琉球石灰岩からなら中位面と下位面上には、琉球石灰岩の風化土壌である赤褐色のテラロッサが分布する。この土壌は島尻マーヂとよばれ、微アルカリ性から中性のジャーガルに次ぎ肥沃である。島尻マーヂは、いっぱんに土壌層が浅いので保水力に乏しく、干害を受けやすい。宇宜野湾でも島尻マーヂは後原をはじめ、前田原、薄倉原、山川原の普天間飛行場の金網沿いから西側に分布し、その東側にはジャーガルが分布する。



第5図 宇宜野湾を通る地形断面図

〔上原作製。地質境界は推定〕

写真1
メーンサクガマ方向を望む。サクヌカーは右側の金網の中にあった。1985 年 8 月 14 日

3 低 地

低地は海岸低地と谷底低地に分けられる。海岸低地はおもに海の沖積作用によって形成されたもので、宜野湾市西側の海岸に沿って細長く分布する。これは海成段丘の沖積面である。谷底低地は河川によって形成された谷底の平坦な低地である。丘陵や段丘面を開析する谷に存在し、横断形はいっぱんに皿状である。字宜野湾では、前田原の浅い谷に認められる。

海岸低地の土壌は粘土や砂礫からなる沖積土壌であり、砂が多くなるとカニクなどとよばれる。いっぽう丘陵や段丘面を開析する谷の谷底低地は、島尻層群の泥岩層中に形成されていることが多く、そこに存在する土壌は、ジャーガルとほとんど変わらない。

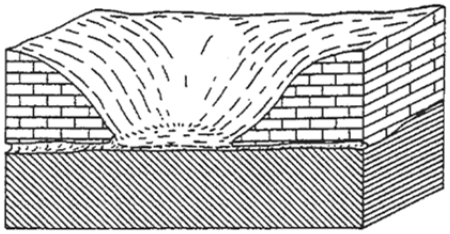
4 カルスト地形

海岸段丘を構成し、炭酸カルシウム（$CaCO^3$）を多く含む琉球石灰岩は、炭酸ガス（CO^2）を合む水によって溶かされる。その結果、段丘面上にはドリーネやウバーレ、石灰岩堤、洞穴（鍾乳洞）、ポノール（吸込み穴）、カルスト湧泉などのさまざまな地形が形成される。このように石灰岩などの岩石が溶食（岩石が溶かされる化学的な風化作用）されて生じる凹凸に富む地形をカルスト地形という。カルストは、ユーゴスラビアの石灰岩地域の地名であり、この地域に形成されている独特の地形から、いっぱんに石灰岩の地形をさすようになった。宇宜野湾にもいくつかのカルスト地形がみられる。

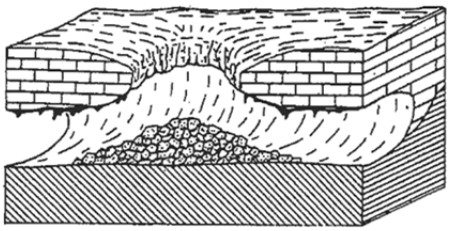
ドリーネ

ドリーネは円または楕円形の輪郭をした摺鉢（すりばち）状ないし皿状のカルスト凹地である。ドリーネは成因から、石灰岩の溶解によって形成された溶食ドリーネと、鍾乳洞の天井の一部が崩壊して生じた陥没ドリーネなどに分類される（第 6 図参照）。宇宜野湾には、クマイアブドリーネやメーヌカードリーネ、インガードリーネがあり、いずれも海岸段丘中位面の八〇から九〇メートル付近に位置する。これらのドリーネの底には、クマイアブやカーグムヤーガマなどの鍾乳洞が存在する。インガーとメーヌカーは、ドリーネの中に湧出するカルスト湧泉であり、メーヌカーの湧水はドリーネの中にあるカーグムヤーガマに吸い込まれる（第 7 図）。

すなわちカーグムヤーガマやクマイアブの鍾乳洞は、メーンサクガマと国吉前（クニシヌメー）ヌガマと同様の、地表の水が地中に吸い込まれるポノール（吸込み穴）である。メーヌカードリーネは長径が約七〇メートル、短径が約六〇メートル、深さが六メートルほどの巨大なドリーネである。クマイアブドリーネは洞口直径が約一メートル、深さが約一メートルと小さい。これらのドリーネは一部に急傾斜するドリーネ壁と鍾乳洞が存在することから陥没ドリーネと考えられる。

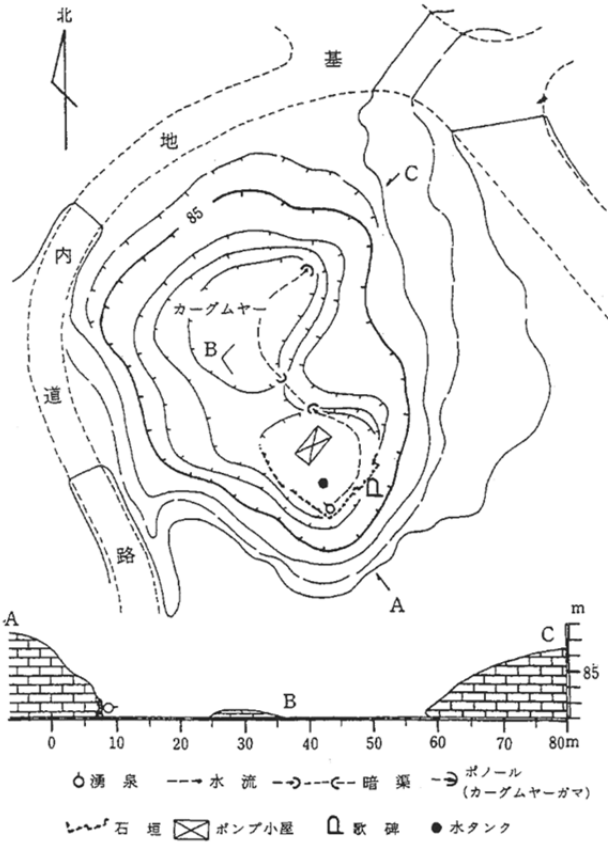


溶食ドリーネ



陥没ドリーネ

溶食ドリーネと陥没ドリーネの模式図
（上原作製）



メーヌカードリーネの地形図及び模式断面図

（宜野湾市発行「$\frac{1}{500}$宜野湾市地形図ＪＥ—06—08—01」に加筆・修正を加え上原作製。等高線間隔は１ｍ。）

ウバーレ

ウバーレは、いくつかのドリーネが結合して生じる不規則な輪郭の凹地である。ウバーレは宇宜野湾には存在しないが、大吹原の南、宇佐真下西原と宇美栄原水玉屋（ミジタマヤー）原にかけて、典型的な水玉屋ウバーレがある。なおドリーネやウバーレが結合して形成されるさらに大きな凹地はポリエとよばれるが、宇宜野湾を含め、周辺には存在しない。

鍾乳洞

さまざまな要因によって形成されている地中の空洞を洞穴と総称するが、中でも石灰岩中に地下水の溶解や侵食作用によって形成され、鍾乳石のあるものを鍾乳洞という。沖縄では、鍾乳洞はガマ・アブ・ティラなどとよばれることが多い（浦添市教育委員会、浦添市の洞穴調査報告書、一九八二）。宇宜野湾の鍾乳洞には、ガマとアブがつけられている。なお鉱山用語に「がま」という言葉があり、地質学用語の晶洞（鉱脈や鉱体、あるいは岩石内に生じた空洞）と同義語がある。沖縄のガマも地下の空洞を指す言葉であり、共通性があるとは興味深い。

宇宜野湾には多くの鍾乳洞が存在したが、戦後の飛行場や住宅建設にともない失われ、現在はクマイアブ、カーグムヤーガマ、メーンサクーガマ、トゥヌカーブだけが残っている（第9図参照）。クマイアブとカーグムヤーガマはいずれも洞長が八〇メートルほどの横穴である（沖縄県教育委員会、沖縄県洞穴実態調書Ⅱ、一九七九）。沖縄では、鍾乳洞は人々とのかかわりが深く、古くは墓所に利用されたことがあり、したがって信仰の対象となることも多い。クマイアブの洞口にも香炉が置かれている（写真3参照）。また、去る沖縄戦では避難場

所として利用され、数々の悲劇をともないながら、多くの住民の生命財産を守った。現存しないが、国吉ヌ前ヌガマには、戦争中に一時百人以上の人々が隠れたという。

写真2　クマイアブドリーネ
北側からみたクマイアブドリーネ。海成段丘中位面の標高 80～90m付近に位置する。1983 年 7 月

写真3　クマイアブの洞口
クマイアブドリーネの中にあるクマイアブ洞口の直径は1mほどである。洞口の前にはブロック囲いの香炉があり、線香が置かれている。1983 年 7 月

石灰岩堤

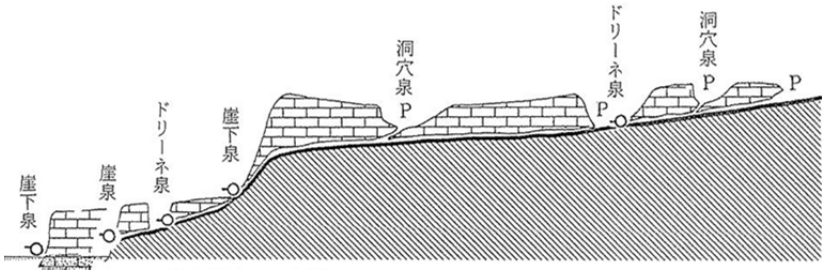
石灰岩堤は、ライムストンウォールともいい、琉球石灰岩台地の縁に形成されている堤防状の地形であり、石灰岩が溶けずに残ったものである。この地形は国内では、亜熱帯気候地域である琉球列島だけにみられ、琉球列島が熱帯地形の存在する地域であることを示すものである。宇宜野湾には、石灰岩堤は認められないが、宜野湾市南部の字嘉数から浦添市字西原に伸びる断層崖に沿って形成されている（第4図参照）。

カルスト湧泉

地中に浸透した水が地下水となり、自然の状態で再び地表に現われて、湧き出る所を、泉あるいは湧泉という。そのなかでも石灰岩台地にみられるものをカルスト湧泉という。宇宜野湾や周辺地域のカルスト湧泉は、地下川が透水層である琉球石灰岩と不透水層の島尻層群泥岩との不整合面付近に形成されている鍾乳洞から湧出する洞穴泉の例が多い。これらの湧泉は地形的にドリーネ泉、崖泉、崖下泉などに分類される（第8図参照）。

ドリーネ泉は、宇宜野湾のメーヌカーやインガーのように、ドリーネの底に湧出し、同じドリーネ中の吸込み穴（ポノール）に流入するものである。この泉は地下に降りて水を汲むので、降り井（ウリカー）や暗川（クラガー）などとよばれるものも含める。崖泉と崖下泉は、段丘崖や段丘面を峡谷をなして流れる河川の河岸の崖の途中や崖下に分布し、琉球石灰岩と島尻層群泥岩の不整合面の位置に決定されることが多い。宇宜野湾の湧泉は、部落が段丘面上に位置することから、ほとんどドリーネ泉である。

メーヌカーはメーヌカードリーネ底の南側の石垣から湧出し（写真4参照）、小さな流れとなって暗渠を通り、北側に開口するカーグムヤーガマに流入する（第7図参照）。インガーは小さなドリーネ底の東側に湧出すると思われるが、石垣が崩れ落ちているのでよくわからない（写真5参照）。インガーの名称は、沖縄県の各地に伝えられるように、犬が発見したことに由来する。なお、飛行場建設によって埋められたクシヌカーや喜瀬ヌメーヌガマ、クチグヮーガマ、ナガブーなどもドリーネ泉であったらしい。クシヌカーの水は、窪地の中にある穴から湧出して、別の穴に吸い込まれていた。喜瀬ヌメーヌガマには石段が造られ、周辺の家庭は、そこから水を汲んでいた。



P:ポノール（吸込み穴）

第8図　宜野湾台地における湧泉の分類（上原作製）

東↑

↙
北

南
↗

写真4　メーヌカーの湧出口

拝んでいる方向にある細い木の根本から約 30 ㎝ほど上の石垣のすき間から湧出している。湧き出てくる水に向い人々の健康村の発展を祈っている。
1983 年 8 月 14 日

写真5　インガー

写真の右手が南、左手は北。インガーはドリーネの中にある湧水である。湧出口付近の石積みは崩れている。その上部に香炉がある。標高はおよそ 92m。
1983 年 8 月 14 日

5　字宜野湾の水利用

水は人間にとって欠くことのできない、生命の源である。地面を穿ち井戸を掘る道具や技術のなかった時代の人々は、水が容易に得られるところに村を構えた。沖縄本島の中南部のように、透水性の琉球石灰岩の台地が広がる地域では、さまざまな形態の湧泉が数多く分布している。そこで人々は湧泉を探し求めて村を形成した。

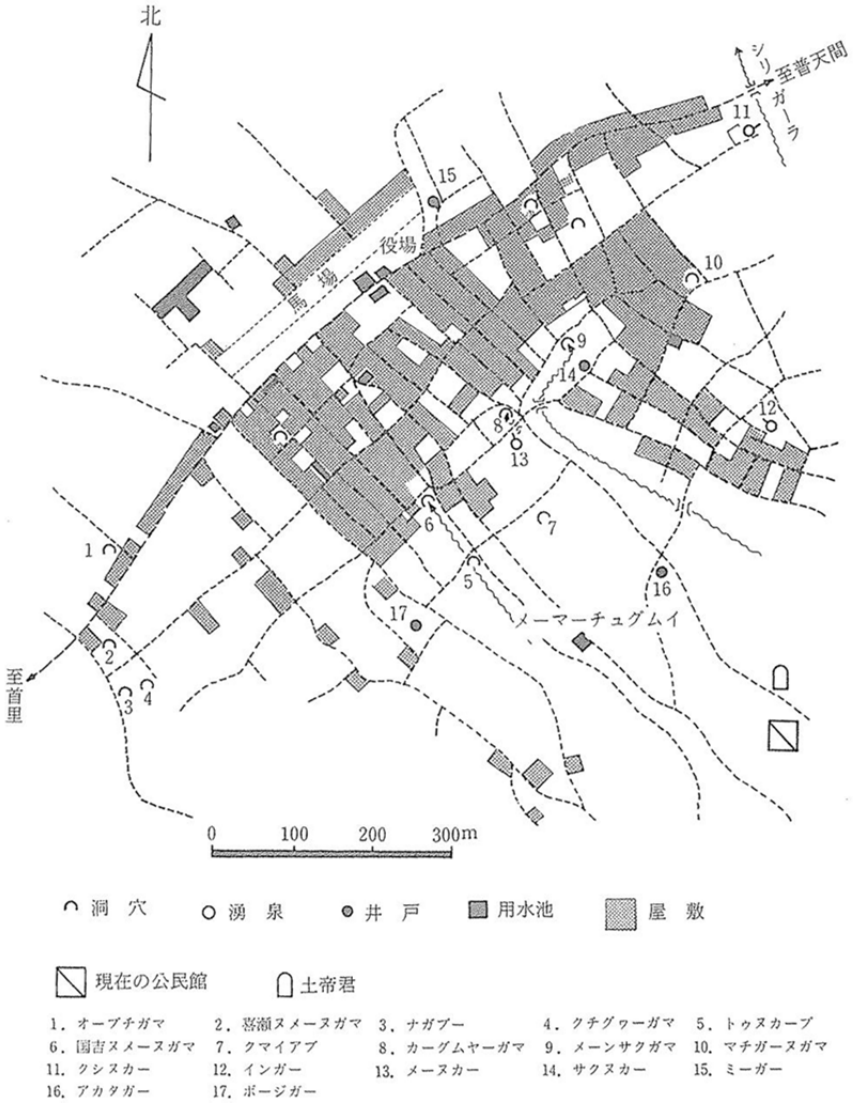
多くの場合、湧泉は石垣によってしっかりと保護され、水を汲むのに足場の悪い湧泉には石の階段を設け、また、大切な水が汚染されることのないように周辺の環境を整備した。さらに湧水口付近には香炉を据えて、湧泉への敬愛の念を示した。湧泉は村人の集まるにぎやかな広場でもあり、飲料水を汲み、洗濯や入浴を行ないながら話題を交換した。子供達にとっては格好の水遊び場でもあった。村の人口が増え、井戸を掘る道具や技術、経済力が整うにしたがって、自分達の足下の水を自由に利用できるようになった。近年、簡易水と上水道の普及にともない、湧泉の利用は減少した。しかし、湧泉の中には、村立てと関連する産井（ウブガー）のように拝井泉（ウガミガー）として、年中行事のなかで重要な地位を占めるものもある。したがって、湧泉は村の歴史を語る重要な財産である。

字宜野湾にも多くの湧泉や井戸、用水池があり（第9図参照）、飲料や生活、農業用水に利用された。そのなかでも、戦前まで利用されたのは、喜瀬ヌメーヌガマ（ドリーネ泉）、サクヌカー（井戸？）、メーヌカー（ドリーネ泉）、クシヌカー（ドリーネ泉）、ミーガー（井戸）であった。インガー（ドリーネ泉）は石垣によって整備されているが、水量の少ないこともあり、利用されなかった。アカタガーは一部施設が残っていたが水はなく、拝井泉であった。メーマーチュクムイとアガリジョーグムイは人工の用水池であり、農業用水として使用された。また部落内には、各班毎に防火用水池もつくられていた。

明治のなかば頃までの字宜野湾の水利用は、クシヌカーやサクヌカー、メーヌカー、喜瀬ヌメーヌガマの湧泉と井戸に頼ることが多かった。しかし、これらの湧泉や井戸は、地下水路（地下川）の上流部に位置するという地形的条件によって、例年に比べて降水量の少ないヒャーイ年（干ばつの年）には、水量がかなり減少したと考えられる。とくに、今から八〇年ほど前の明治後期に発生した、大ヒャーイ年には、これらの湧泉の井戸の水量は激減した。メーヌカーでは、水を汲む人々が長蛇の列をつくつた。さらに、字宜野湾の西方に隣接する字貴志喜のムウンヌカー（森川）からも、牛馬に背負わせた樽で水を運んだ。そこで、字宜野湾の人々は、メーンサクガマの北西約三〇〇メートルの地点に新しい共同井戸、ミーガーを掘った。水量の豊かなミーガーが掘られてからは、ヒャーイ年でも水に事欠くことは少なくなった。

戦前まで利用されていたこれらの湧泉、井戸、用水池は、戦後の飛行場建設にともなう集落の移動と共にほとんど失われてしまった。しかし、メーメカーだけは、戦後も字宜野湾の簡易水道源に利用された。

おもな湧泉と井戸の利用状況は、次のようであった。



第9図　1944年（昭和19）当時の字宜野湾の集落と洞穴、湧泉、井戸、用水池の分布

（字宜野湾郷友会作製「字宜野湾地形図」より上原作製）

クシヌカー

この湧泉は、字宜野湾と神山との境界をなすシリガーラの左岸にあった。水量が比較的豊富であったので、神山の人々にも飲料水として利用されていた。また、クシヌカーに隣接して、トトンバ（と殺場）もあり、この湧泉を利用していた。戦後は飛行場の滑走路となったが、大雨の毎に陥没したので、米軍によってセメントが流し込まれて埋められた。

サクヌカー

この井戸は深さが約五ヒロ（約九メートル）以上もあり、周囲の壁は石積みが施され、ら旋状の石段を降りて水を汲んだ。字宜野湾の産井泉（ウブガー）であったが、メーヌカーが整備されると、もっぱら洗濯用水に利用された。サクヌカーも飛行場建設にともない消失したが、現在でも清明やお盆の際には基地内において、人々の健康と村の発展を祈って、祈願が行なわれている。

メーヌカー

字宜野湾で現存する最も立派な湧泉である。部落のほぼ中央部に位置し、サクヌカーから産井泉の機能を引き継ぎ、子供が生まれたときの産湯や元旦の黄金水を汲み、飲料水としても広く戦前まで利用されていた。昭和八年に建立されたメーヌカーの歌碑に歌われている「産泉　御万人のまぎり　拝みすてやへら　玉の御水の　もゝの御恩」をみると、字宜野湾の人々のメーヌカーへの強い敬愛の念とメーヌカーを通じて人々の融和と村の発展を祈っていたことが理解される。戦後のメーヌカーは飛行場に接収されたが、一九六八年まで、土帝君の丘に設置された水タンクへポンプで汲みあげられ、簡易水道水源に利用されていた。メーヌカーは現在でも盆や清明の際には、村人によって草刈り清掃と祈願が行なわれている（写真 4 参照）。

ミーガー

ミーガーは、今から八〇年ほど前（明治後期）に七ヵ月余も続いたヒャーイ（干ばつ）の年に掘られた新しい共同井戸であり、七ヒロ（約一二・六メートル）以上の深さがあり、水量も豊かであった。その頃には、進んだ土木、測量技術はなかったが、たった一個のカラハーイ（磁石）を使用して掘り当てられたのである。まず何人かでメーンサクガマから洞穴内に入り方位を測りながら、洞内の水のある所を確認した。それから地上に出た人々はカラハーイを持って、各屋敷を通り抜けながら洞内の水のある所のおおよその位置を決めた。そして、その周辺の地面を一番、二番というように石で強く打ちつけ、洞内に残っている人々がその昔を確認して、井戸を掘る地点を決定した。それから村人が総出でミーガーを掘ったのである。ミーガーは字宜野湾の人々の素晴らしい知恵と協力の成果であった。その後、字宜野湾では水に困ることは少なくなったのである。しかし、ミーガーも戦後の飛行場建設にともない失われてしまった。

宜野湾市大字・小字区分図

第五章　文化財と名所旧跡

字宜野湾は、戦前は宜野湾村の中心地であった。一九三五（昭和一〇）年十二月末日現在の戸数五〇〇戸、人口二,〇〇〇人で、村落としてはかなり大きなムラであった。村役場・小学校・農民道場・郵便局などの公共の施設もあったし、宜野湾（ヂノーン）マチグヮーに近隣の農民たちが集まって来てさつま芋や野菜などを売っていた。

また、年輩の方々にとって忘れがたいのは宜野湾並松街道であろう。宜野湾馬場（ウマイー）　や闘牛場（ミーハギウシナー）周辺の並松の姿は実に絶景であったといわれている。北は普天間ガー側に境する石平部落から南はヒヤーガーラ橋まで、三千余の松並が延々と並んでいたが、去る沖縄戦で日本軍の陣地構築のために切り倒され、また、米軍戦車の通行の妨げになるということで伐採された。当時の琉球松は大人三、四名で抱える程大きかったが、数名の人びとが軍の命を受けて伐採作業に従事したと言われている。また、我如古平松や大山平松のような名木を失ったことは、私たち市民にとってこのうえない損失だった。

宜野湾市は、沖縄戦で多くの人命と共に貴重な文化財などを失った。しかし、開発に伴う移動や破壊をまぬがれた文化財（村ガー・御嶽・拝所・洞穴など）が基地内に保存されている。今後、継続調査を行なうと共に、保全の策（修繕及び修復、境界標識の設置、説明板等の設置要請）を早急に検討して、全区民の大切な文化遺産として保存し、活用しなければならないであろう。基地内の文化財の保護及び管理については、いろいろの困難が伴うので、区民が気軽に利用し活用（カー拝み）できるような配慮がほしいものである。

現在基地内には、かつて宜野湾ノロに管掌されていた拝所がかなりある。前ーヌ御嶽、中ヌ御嶽、後ヌ御嶽、そしてメーヌカー、インガー（犬ガー）などである。

後ヌ御嶽は、飛行場のフェンスに近い丘陵地にあって、北側は神山部落と宜野湾に接して流れるシリガーラに急崖をなして面し、東側はクニシの御嶽に連なって丘状をなし、南西域側は緩かな斜面を形成し、戦前の

部落跡や基地方面の施設に至っている。御嶽は原形のまま完全に保存されており、その頂部には二基の石造祠墓や「乾隆五六年辛亥五月穀旦　宜野湾王子朝陽」（一七九一年）、「嘉慶八年癸亥九月穀旦　宜野湾王子朝祥」（一八〇三年）と刻銘された凝灰岩でつくられた石燈寵が二対立っている。また北側の崖下には、カニクェーウマヌヤーと称される洞窟がある。

シリガーラ周辺の崖縁には、古い洞窟や野面積みをした古墓群が数多く所在していたが、一九五五（昭和三十）年頃、米軍による立ち退き命令によって厨子甕などを移勤したため現在は空墓となっている。

また、ムラの守護神として「土帝君」（トゥーティークー）がある。去る沖縄戦で神像が失われたが、約四十年ぶりに、祠を修復し、敷地を整備して、石彫の神像二体を安置してある。

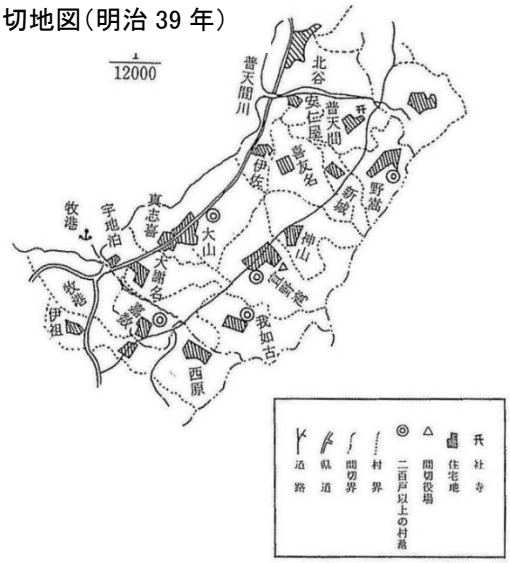
なお、宜野湾部落の宗家は、ナナムートゥ「大里腹、玉那覇（タンナファ）、嘉手苅（ヂノーンヌール）、ジョウ腹、山城腹、カシミー、メーヌ又吉」と称されている。七系の集団により構成されていたのであるが、本御嶽は大里・嘉手苅・玉那覇の三系によって掌轄されていた。

戦後、宜野湾部落は、ほとんどが原野と畑地であった前田原や山川原、薄倉原への移動を余儀なくされた。村ガー・御嶽・拝所などは基地内に残っているが、ノロ敷地と殿は一九六四（昭和三九）年頃、米軍が倉庫を建設したさいに移して、ノロ家である嘉手苅家の屋敷内に安置して祀っている。

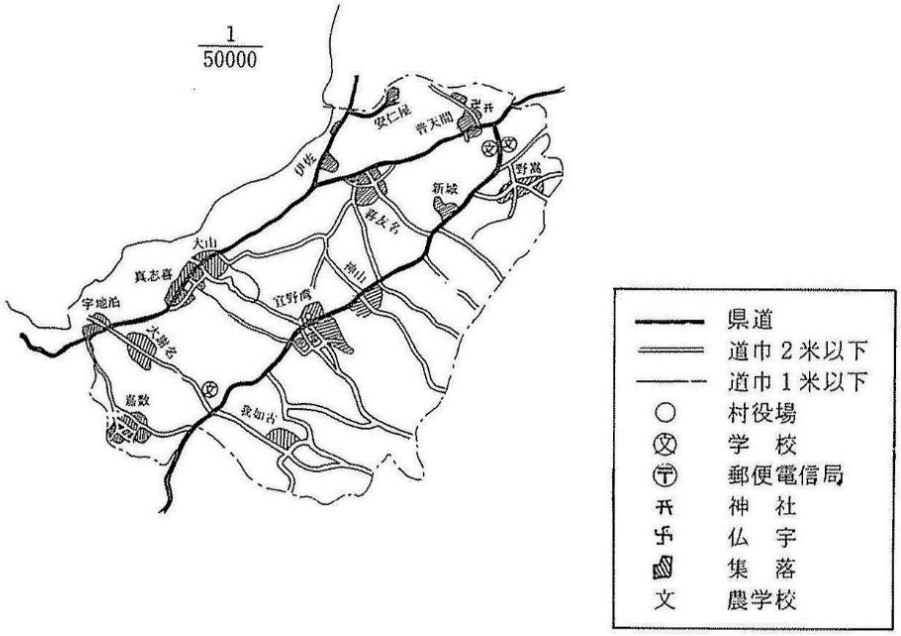
自然やムラは開発や社会の変貌によって大きく変わりつつある。伝統行事も民話や伝承も豊かな自然と風土を背景に生まれたものである。昔から伝わる旧六月の大綱引、部落民総出によるエイサー、八月のカンカー祭、旧二月のクスッキー、旧三月遊（さんぐわちあし）びなどは、宜野湾部落の伝統行事である。しかし、年月が過ぎ都市化が進むにつれて、年中行事や祭が忘れ去られようとしている。ウマチー行事が四回（二月、三月、五月、六月）あり、二、三月は芋神酒、五、六月のウマチーは米の御神酒を供えていた。旧六月のウマチーは馬場を中心に綱引き（夜綱）が行なわれた。子供たちによる「ワラバー綱」 のあと「ウフ綱」が催されたという。メーンダカリが雄綱（ヲゥージナ）、クシンダカリが雌綱（ミージナ）で、一回勝負で雌綱が勝つと世界報があるとされていた。

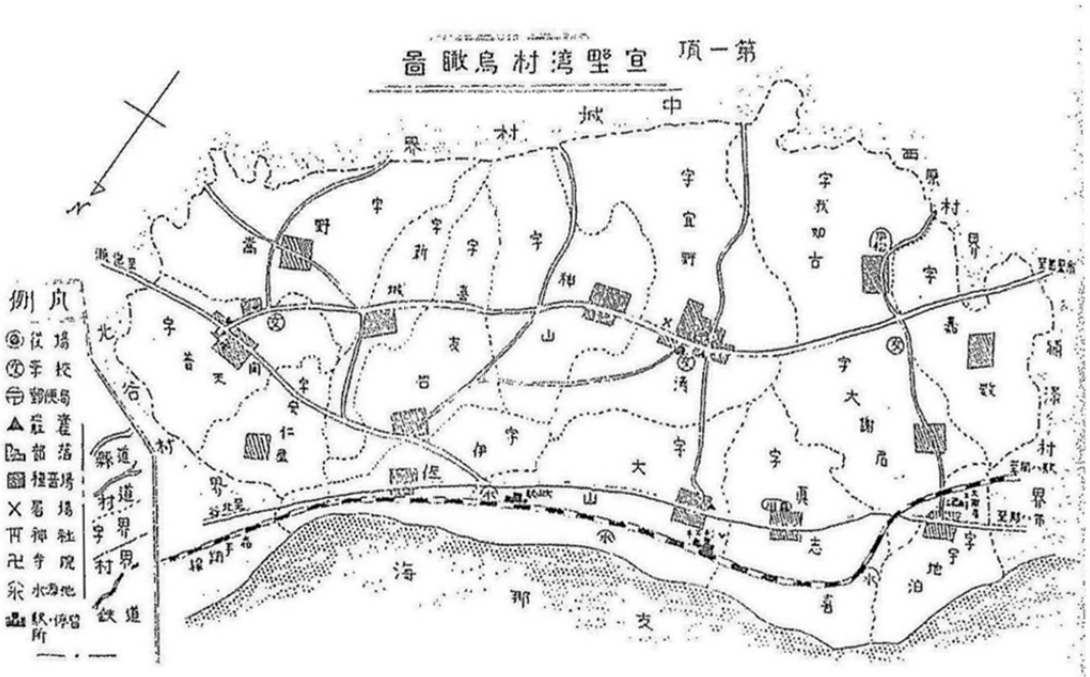
宇宜野湾は、かつて純農村であったが、沖縄国際大学を誘致して以後は急速に家が建ち並び、商店やアパートが増えてきて都市化現象が進んでいる。開発に伴い町やムラの概況が次第に変わりつつある。伝統文化や自然環境、文化財も失われつつある。失われていく文化財をどのように保存していくかということは極めて重要な課題であるが、地域や暮らしのなかで生かす方向で検討をつづけ、活用を図らなければならない。

宜野湾間切地図（明治 39 年）

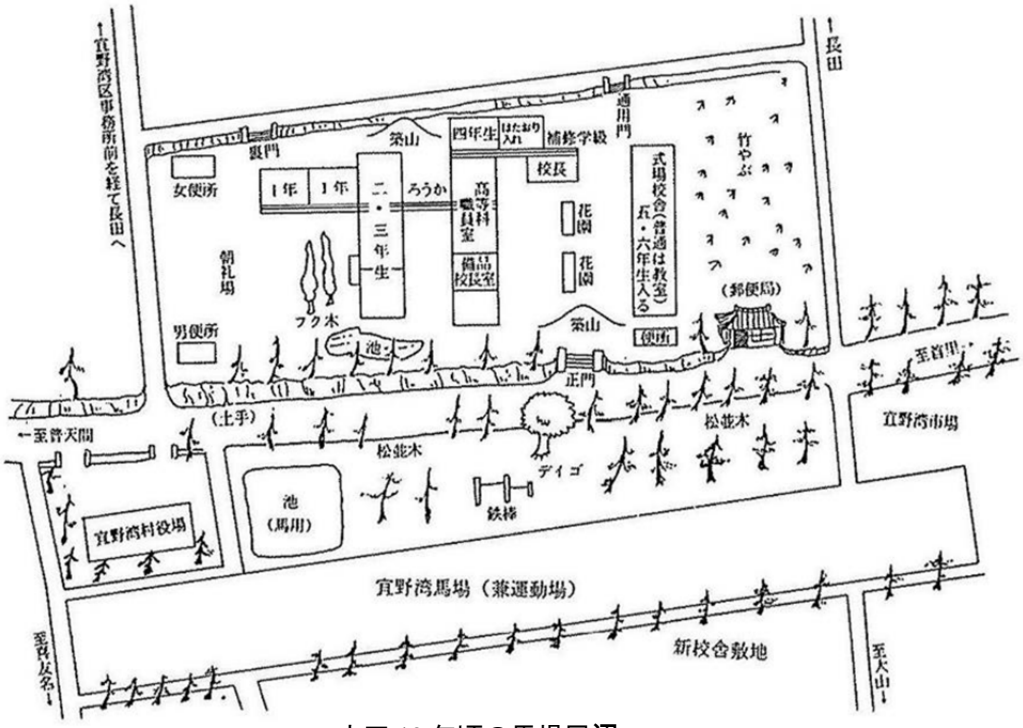


大正のころの宜野湾





昭和 10 年度指定経済厚生計画より宜野湾村の略図（提供）仲村栄春氏



大正 13 年頃の馬場周辺

宜野湾並松(ジノーンナンマツ)

ジノーンナンマツ(宜野湾街道の松並木)は十八世紀に蔡温の意志を継承して植栽されたといわれ、宜野湾街道の両側に林立した。街道は普天間宮への参道として、また宜野湾村役場・学校・郵便局などがあり、ジノーンマチグヮーが開かれ活況を呈していた。ジノーンナンマツは道行く人々に陰を添え、憩の場でもあった。

松並木は、一九三二(昭和七)年に天然記念物として指定をうけている。同年発行の『史蹟名勝天然記念物』第七集、第十一号に次のように記載されている。

> 宜野湾街道の松並木(口絵解説)
>
> 沖縄県中頭郡宜野湾街道にあり、北は普天間宮より起り、南は浦添村の境界に達するものを主とし、其の延長約一里半、株数二、九四四本、目通幹囲八尺以上のもの一二三株、琉球松の並木として代表的のものなり。今回天然記念物として指定せらる。

メーヌカー(産泉)

戦前はウブガーとして利用された。また、飲み水を汲む人、せんたく・入浴をする人などムラの人々の集まる場所で生活の中心地だった。

一九三三(昭和八)年に産泉の碑(製作・渡嘉敷唯徳)が建立され、現存している。碑には琉歌が刻まれている。

カーの大半が土砂で埋められているが、泉への降り口の石畳や排水溝の石積は完全に残されており、部落唯一のカー(ウブガー)として保存し、村ガーの名残りを後世の子供達へ受け継がなければならない。また湧出口に一個のコーロも安置されている。

▲産泉（メーヌカー）
積石の状況を見る事ができる。

▲左側はムラの婦人・老人たちの沐浴に利用された場所

クシヌウタキ（後ヌ御嶽）

真中のコーロを中心に4つの燈籠が保存されている。

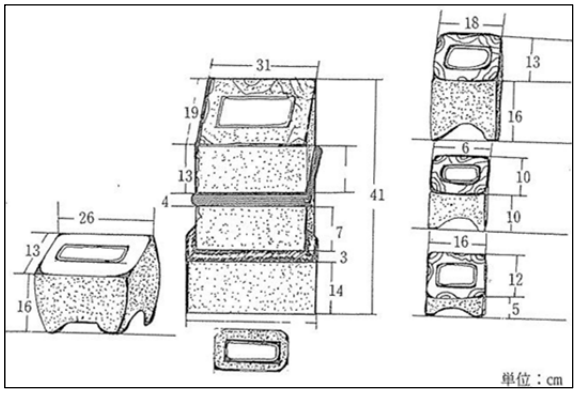
宜野湾の後原（通称、シリガーラ）の丘陵側に位置し竹や樹木等が繁茂し、神域は完全に残され、部落のおいたちを知る貴重な文化財である。

ウタキは原型のまま保存され、石造の燈籠が四基あり、その一対は乾隆五十六年辛亥（一七九一年）奉納宜野湾王子朝祥の記名が燈籠にある。他の一対は嘉慶八年癸亥（一八〇三年）と記されている。石造燈籠は、四隅に位置し、その真中に段状に六つの大小のコーロがある。

さらに、燈籠の地点から二〇メートル進んだ竹藪の奥地に、六十年前に造られた四角型の石造の祠（墓）が二基あり、右側が玉那覇家の墓、左側は大里家の先祖の墓として造られたという。大里家の墓石は崩れているが、復旧可能である。また詞の中には数個のコーロが安置されている。

また二基の墓のすぐ後方に、破壊された石塚跡と見られるものがある。この御嶽の北側崖下は、戦前の古墓群となって放置され、その中に「カニクェーウマヌヤー」と言われた伝説の洞穴もある。

この御嶽は、竹や樹木が繁茂し、神域はほぼ原形をとどめているので、重要な文化遺産として保存していかなければならない。



▲コ―ロ実測図
4つの燈籠を中心にコーロが安置され、6つのコ―ロが階状に置かれている。

▲玉那覇家の祠（墓）
石中には数個のコーロが安置されている。また、左側の祠（大里家の墓であろう）は、かなり崩れているが復旧が可能である。

土帝君

宜野湾ムラの守護神に「土帝君」(トゥーティークー)がある。去った戦争で神像が失われたが四〇年ぶりに、ほこらを修復し、石彫神像二体が安置されている。

トゥーティークーがいつごろ沖縄に伝来したかは不明であるが、一六九八(元禄一一、尚貞三〇)年、紫金大夫、大嶺親方基橋が中国から帰る際、土帝君を招来して、采邑大嶺村に奉ったと「球陽」に出ている。土帝君は農業の神であるので、田畑の中に奉られる。市内では、大謝名と宜野湾区に現存する

土　帝　君

宜野湾のトゥーティークーは屋号イシンミ(石嶺)の先祖が中国大陸から勧請したと伝えられる。勧請の年代は不明であるが、「球陽」第三の尚敬王 22 年(1743 年)の条に、宜野湾の土地君に関する記事がある。中国の「土地公」が「球陽」では「土地君」と記され、近代以降研究者の間で「土帝君」と記されるようになった。地元宜野湾ではトゥーティークーと呼びならわしてきた。

宜野湾ではトゥーティークーを五穀豊穣の神・ムラの守護神として篤く敬い、沖縄戦で神像が失われた後も久しく例祭(旧暦2月2日)をとり行ってきた。郷友会は 1984 年2月土帝君祠を修復、敷地の整備を行い、3月4日新たに石彫神像を安置した。神像は二体(一体は夫人)である。台湾の中央研究院民族学研究所の御教示に基づいて、台北で彫刻された格式ある神像である。

1984 年3月4日(旧暦2月2日)

字宜野湾郷友会

土帝君祠に安置された神像(一体は夫人)

はらから之塔

日本で唯一の地上戦となった沖縄戦は、住民も戦禍に巻きこみ、戦闘員・非戦闘員の区別なく多くの犠牲者がでた。

字宜野湾では太平洋戦争による戦死者が二六二名である。そのうち二一二名が沖縄戦で戦死した。字宜野湾において沖縄戦で戦死者がでた家は四二・八パーセント(一一〇戸)である(第一編、第七章「宜野湾住民の沖縄戦体験と戦後生活の出発」を参照)。

戦後、字宜野湾では、毎年六月二三日の慰霊の目の前後に、遺族や婦人会等を中心にして浦添・西原・南部の戦跡を参拝していた。しかし、遺族でも特に年寄りの方などは、参拝に行くことが困難ということもあって、ぜひ戦没者を部落の皆で一緒になって慰めることができるように慰霊の塔をつくろう、という声が持ち上がってきた。

そして一九六七(昭和四二)年、自治会長・宮城仁政、遺族会長・国吉真光、市会議員・比嘉盛栄の三氏が中心になって、慰霊の塔の建立計画が進められていったのである。

当時の自治会の重要事項の決議する土地委員会において話し合いがなされ、慰霊の塔は、字有地で皆が集まることができる格好の場所ということで、マータクドーに建立することに決定した。

碑名も住民に公募した結果、久志助明さんの提案で、お互いに同胞で兄弟姉妹という意味の「はらから之塔」とつけられた。

「はらから之塔」には、戦死者の御芳名が記されることになった。対象は、字宜野湾の出身で第二次世界大戦における戦死者、軍人・軍属・一般住民の犠牲者とし、各家庭から申請してもらい、名簿(第二次世界大戦前で死亡の一名を含む)を作成した。それを班ごとに間違いがないかどうかを閲覧させて確認したものを、久志助明さんに揮毫をお願いし、ご芳名をトラバーチンに刻んだ。工事費(二八四ドル七四セント)は、自治会の「特別会計」から充てられた。

一九六八(昭和四三)年一月「はらから之塔」が建立された。

ふるさとに　みたましずめて　はらからも　むねやすらぎて　とわにねむらん
(「はらから之塔」より)

宜野湾住民の念願だった「はらから之塔」が建立され遺族会・自治会主催で、遺族や年寄りの方を始め区民多数が参列して慰霊祭が挙行された。

しかし、御芳名の文字の磨滅などにより、一九七七(昭和五二)　年にはトラバーチンから御影石に切り換えられた。その際、新たに修理や御芳名の一部訂正などがなされた。現在は二四一名の御芳名が刻してある。

「はらから之塔」は、自治会の管理のもとにおかれていたが、郷友会が設立されたので一九七九(昭和五四)年度から郷友会に移管した。

その後毎年、慰霊の日の前後に、郷友会・自治会・遺族会の三者の共催で、百名余の遺族の方、区民が参加して「はらから之塔」で慰霊祭を行なっている(口絵参照)。式典後は公民館に場所を移し、平和を誓い合う懇談の機会を設け、戦争体験発表や奉納舞踊・演武等を催し、意義ある慰霊祭になるように努めている。

戦争体験を反省し、風化させることなく子や孫に伝え、戦争犠牲者の二四〇余柱の宜野湾区民の同胞のねむる「はらから之塔」の前に永久の平和を願う。

出典：神山誌　宜野湾市字神山郷友会

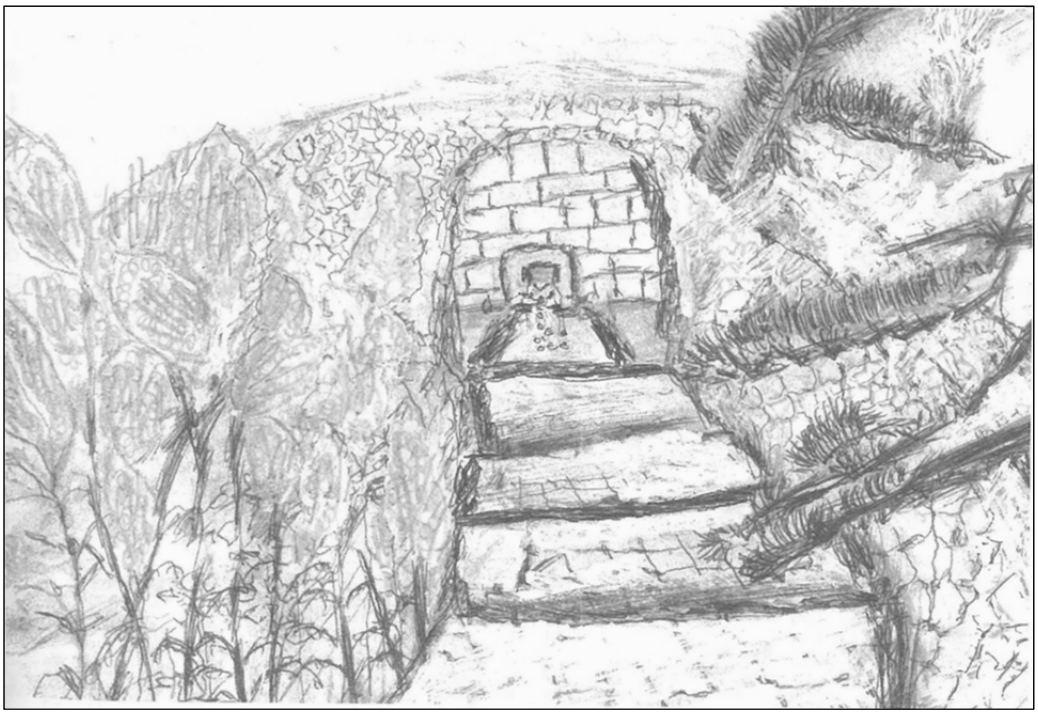
第三節　カー・共同井戸

一、村ガー

神山集落は、東の端に「カンミン森（モー）」と言う小高い丘と松林の森があり、その丘の森から流れる泉が「カー」となって集落内に二つの「村ガー」があった。

一つは前ン渠の「前の川（メーヌカー）」で一年中澄み切った水が流れていた。それは、二番通りの「山城（ヤマグシク）」の側にあった。毎日の水扱みや洗濯、正月の若水汲みなどに利用されたところである。神山の家庭は、金持ちが多く、各家庭にも「つるベガー」（自家用）を持っていたが洗濯や芋くず（澱粉）作り等は、この「村ガー」（共同井戸）を使う家が多かった。

この「前ヌカー」の泉はカーの淵から水が溢れる事はなく、常にチョロチョロと清流の音をたてて「カー」の石垣沿いに流れて、遠い西の「下原」を潤していたと思われる。また、この泉の水が「前ヌクムイ」「大道クムイ」に溜まっていたようである。



メーヌカー（前の川）　のイメージ図

もう一つの「カー」は「後の川（クシヌカー）」と言われ「後ン渠」の人たちがよく利用していた。それは「久保給」の前にあり、洞窟のようになった所から流れ出て、水量豊富でカーの淵から溢れ出て、洗濯には、便利な「カー」であったが、「前ヌカー」のようには清流ではなく、特に大雨の時は濁っていたので、飲み水には適当ではなく洗濯や夏の水浴びに利用されていた。

「後ヌカー」は、水源が浅い所にあったので、日照りや雨期等に左右された。水量が減ったり濁ったりする事があった。平常の気候では常に「カー」の淵から溢れ出ていた。

「前ヌカー」は、気候や天気に左右されず常に清流であったが「カー淵」から、溢れる事はなく、柄杓で汲んで「水ターグ」（石油一斗缶）に入れて飲み水汲みをした。

正月の若水扱みは、懐中電灯や提灯をつけて、午前四時頃から我先にと汲んで来て、新年の「お茶とう」をして、一年の平安を祈願した。神山は殆どの家に井戸があった。ただ深さは七～十三ヒロ（一四～二六メート

ル）で深かった。専門のカーフヤーがいて、いくら掘っても水が出ない時は横穴を掘る場合もあった。井戸には、水質の良い井戸とそうでない井戸があった。

大雨の時でも濁らない井戸は水質がよく、濁る井戸は水質が悪かった。すなわち湧水だけの井戸は水質がよく、雨などが沈みこんでくる井戸は水質が悪かった。

クシクヌカー（後の川）＜宜野湾市文化課提供＞

二、クムイ（池）

クムイ（池）は農村集落には、共同井戸と共に共同クムイもなくてはならぬ大切なものであった。篤農家では広い屋敷に個人用のクムイ（池）が必ず備わっていた。

「美地」は三つもクムイ（池）があった。一つは芋洗い用のクムイ（池）、一つは牛馬を浴びせるクムイ、一つは下（台所・茶の間）の後側に「つるべ川」の溜池クムイで野菜や大根等食材を荒あらいして、つるべで汲んだ水で本洗いしていた。「美地」は「水蔵」といって現在の水タンクも台所の近くにレンガ作りの四角い水タンクがあり、雨水を溜めていた。美地は「住み込み」の下男と女中がおり、常に「通勤の日雇い」畑手伝い人がいたので食事つくりやお茶、動物（牛馬豚）に使用する水も大変な量で水タンクの水や「つるべ川」の水運びでも大変な労働であった。さらに牛馬、豚、山羊の餌作りも多忙であった。こうして個人の家庭でもクムイ（池）はほとんど所有していたが共同のクムイが必要であった。

神山ムラには三つの共同クムイ（池）があった。一つは一番通りの東端で平松の側にあり上原（カンミン森の近くの畑で現在の十九区と金網フェンスの中）の畑で仕事をしてきた人たちが農具を洗ったり牛や馬を浴びせたりしていた。このクムイ（池）は前ヌカーのように、小高い広いカンミン森から流れる湧水が貯まっていたと思う。「前ヌクムイ」と名付けて大掃除の時は敷物のゴザや二クブク（わらで編んだもの）を持って行ってあらったりした。

もう一つは郡道沿いの並松の下にあって一番通りの西の端にあり、大道クムイと言っていた。これは神山ムラの下原（西側：シチャバル）の畑で働いた人たちが農具を洗ったり、郡道沿いの人々（家庭）の芋洗いの場所であった。「儀保小」（断髪屋）の側にあった。

もう一つは郡道沿いの後ン渠の「前徳村小」の前にあった。これも下原の畑仕事をした人や郡道沿いの人た

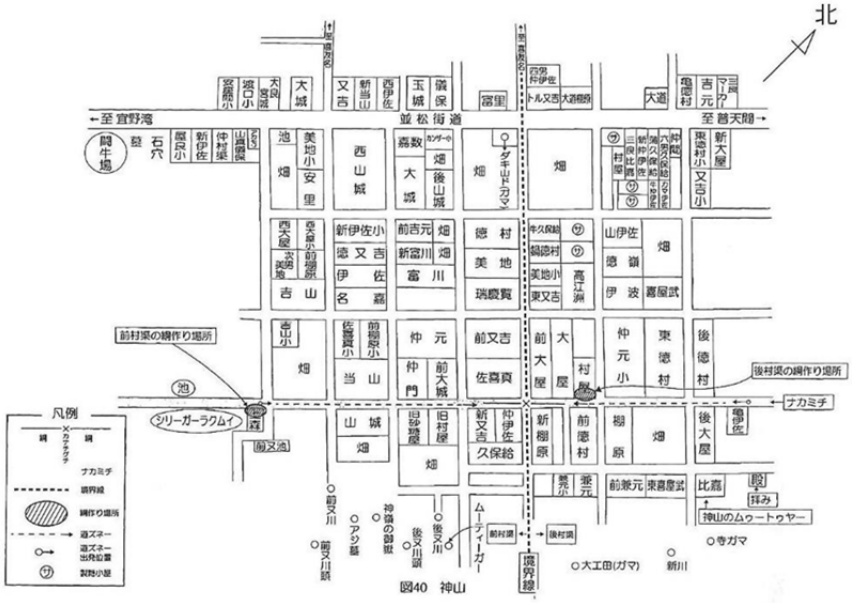
ちの芋洗い場であり、牛や馬を浴びせる場所でもあった。このように共同クムイ（池）は農村集落にはなくてはならない大切なものであった。

資料提供者（調査協力者）：仲本とみ（西大屋）、宮城盛善（三男新又吉）

第四節　戦前の集落

神山の集落は、「ウチカイ実らさ」「イエーキグニ」と他の「字」の人たちや神山の長老たちもよく話していたそうである。「ウチカイ」と言うことは「家並み、屋敷並み」が整然としている様子をいい、イエーキ（金持ち）は、瓦屋が多かったことを物語っていたようである。

因みに神山の「家並み」は東西に七つの通りがあり、（カンミン森の裾野から西の郡道に向かって）また、南北に郡道から数えて五つの通りがあってこれらが碁盤の目のように整然として広い屋敷構え（四百坪以上）となって南向きの門構えで、実に「理」に叶って「風水」のよい屋敷構えであった。



図（一）

例として東西の一番通りは、前ヌクムイから平松ーを過ぎて、「吉山小」「吉山」「玉城」「西大屋」があり、畑一つ隔てて郡道に通じていて明るい通りであった。畑二つ位を隔てて闘牛場（ウシナー）があった。

二番通りは「山城」「当山」「佐喜眞小」「名嘉」「伊佐」「徳又吉」「新伊佐小」「西山城」で郡道に通じていた。二番通りからは一番通りの屋敷の大木や竹が茂り、自分の屋敷の木も茂って少々暗い通りになっていた。「山城」と「当山」の屋敷の前は畑で一番通りの大木の影響を受けずに明るい屋敷であった。

このように東西に郡道に向かって八番通りまであった（神山集落の全体地図は図（一）をご覧ください）。

南北には郡道も合わせて、五番まであって四番通りは、「中道」と言われ仲伊佐の前で大正末期までは綱引きも行われたらしいが昭和の時代からは廃止された。

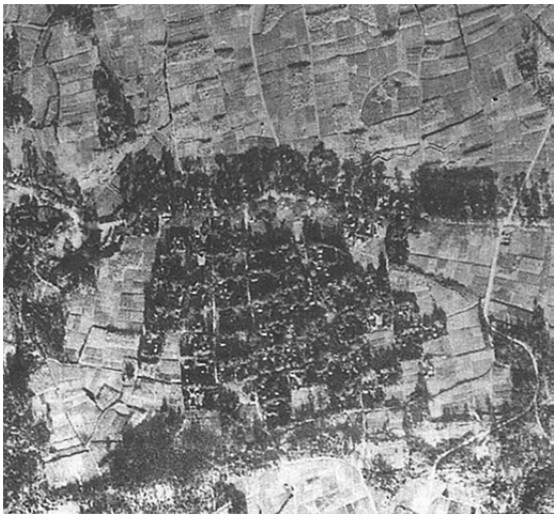
このようにして、集落の殆ど（九割）が、東西の七つの通りに面して、南向きの門構えであった。南北の通りに面していたのは、察温松の郡道沿いにある家（店が二軒、菓子屋その他の家々）と二番から五番までの通りに面した家の門構えは東向きと西向きであった。

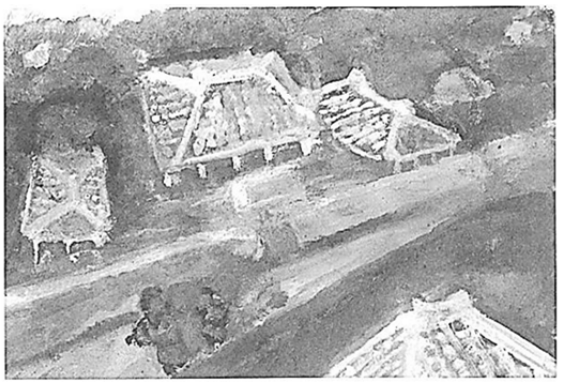
三番通りの「前棚原小」が西向きで「前大城」が東向き、「仲伊佐」が西向きで「高江洲」が東向きで（村屋）の隣であった。

「後村渠」の最後に「東喜屋武」と「亀伊佐」と「比嘉」が西向きの門構えでその他の家は先述した通り東西の

道路に「南向き」に門構えであった。本土並みと言えば道路こそ狭くて、うっそうとした木々に囲まれていたが京都風の碁盤の目のような街並みの風情を思わせる「ウチカイ美らさ」の神山集落であった。

資料提供者、聴取者：仲本とみ（西大屋）、高江洲亀一（棚原）





戦前の神山ムラの航空写真：沖縄県公文書館提供　　イメージ図

第五章　文化・娯楽

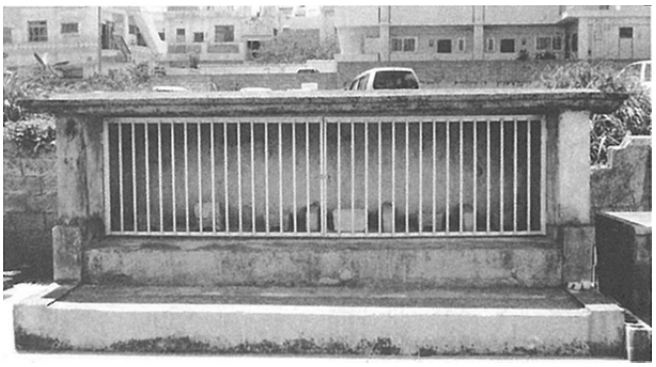
第一節　名所・旧跡

一、名所・旧跡

昭和二十五年頃、神山では基地内にあった聖地・墓などの移転命令が米軍からあった。そこで村の有志が基地内の聖地の香炉や按司墓（アジバカ）の骨壷をマーカーガマへ移したという。当時、マーカーガマは使用を許されていた。その後、昭和五十一年に現郷友会事務所横に祠を設け、次に記する聖地の神々を合祀祠（ごうしほこら）に遷座（せんざ）した。

神嶺（カンミン）の御嶽・根所（比嘉）・寺窟（テラガマ）・頓（トゥン）・前之川（メーヌカー）・後之川（クシヌカー）・新川（ミーガー）・イームイ・アカムイ・伊波の東のガジマヤー（辻）、按司墓（アジバカ）は祠の隣にセメント造りの塚を設けその中に骨を納めてある。

現郷友会事務所横に合祀祠を設置
左から村代火神・根所の火神・先代火神・根所クサイ神・根所神



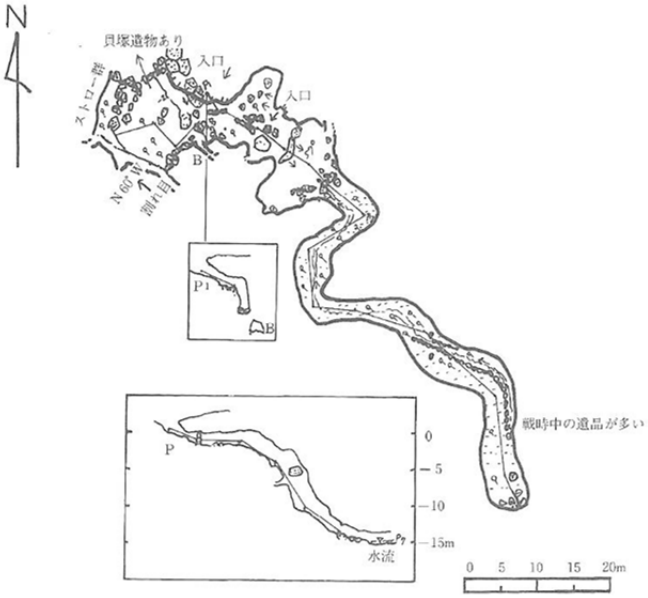
現郷友会事務所横に合祀祠を設置
左から新川・後之川・前之川・頓・寺窟・神嶺

二、神嶺の御嶽と按司墓

国道三三〇号から宜野湾小学校の横道を通って普天間飛行場米軍基地の近くへ行くとフェンス越しに御嶽の森が見える。そこには現在、大きな水タンクが建設されている。神嶺（カンミン） モーと称される海抜一一〇m内外のその石灰岩丘陵の西側斜面には、按司墓（アジバカ）と呼ばれる全長一〇〇mほどの洞窟が位置する。洞窟は約一〇mの落差をもって連結する上洞と下洞よりなり、後者には水流がみられる。上洞の三箇所に開口する入洞口のひとつは二〇㎡内外の広間を形成し、洞外から流入したと考えられる海産貝殻や土器などが散在する。下洞は、沖縄戦の避難場所に利用され、当時の生活を偲ばせる戦災遺物が散乱している。

なお、按司墓に散乱する骨神を収骨した石造の祠は、地元の神山や喜友名部落に在住する一部の一門により厚く尊崇されていた。対して、その近傍にあるンザットヌガマグヮーと称される洞窟は、神山部落の祖先の骨神を祀り、同部落により管掌されていた。現在按司墓の骨神を容れた蔵骨器は、民間地の神山郷友会事務所にアジガユーヌウファカとして移設されている。

現郷友会事務所横に按司墓を設置



アジバカの平面図と縦断面図

出土遺物

沖縄貝塚時代中期に相当する土器や海産貝殻などの遺物が、按司墓の入洞一帯から僅かに出土する。そして、昭和二十五年頃、米軍の強制指示により基地内古墓や拝所が撤去されており、大量の銭貨が洞窟内部に安置してあった蔵骨器の中より出土したとされるが、その行方は不明である。

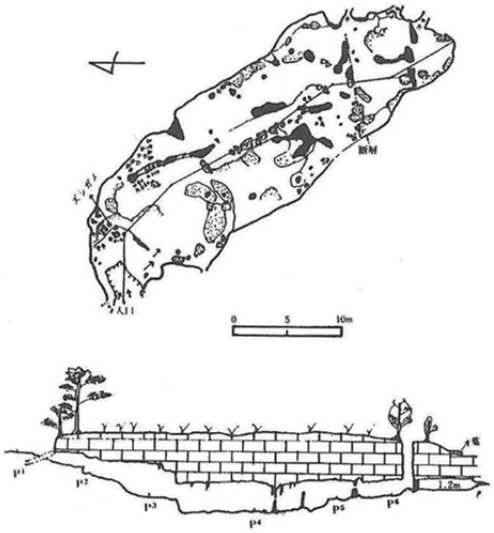
保護に向けて

遺物の散在する按司墓は、さきの給水タンク設置工事で掘削された岩塊や土砂が流入し、次第に埋没しつつある。また、給水タンクの立つ丘陵の西麓には、前之川(メーヌカー)と呼ぶ切石造りの湧泉がそのまま埋没したとされ、一帯の神嶺モーや按司墓の保全と合わせて、十分な配慮が必要である。加えて、古老によると、神山区の草分けは神嶺モーの西麓に始まり、子孫の絶えによって南側に集落を移動したと伝承されることから、その集落把握も検討されるべき課題のひとつである。

そして、下洞に散乱する戦災遺物は、宜野湾市民のくぐりぬけてきた苦難の歴史を語るものであり、その保全が肝要とされる。御嶽の西には按司墓の洞穴があるが、入口はタンク工事の際に大部分が崩されている。洞穴内は貝塚時代中期の遺物包含層が確認されている。按司墓の骨を移動した時、多量の古銭が見つかったという話もある。

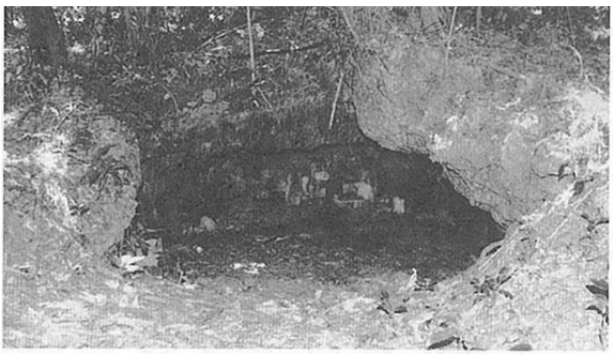
三、神山の寺窟(テラガマ)

嘉数と神山に寺窟と呼ばれるガマ(洞窟)がある。いずれも普天間権現の縁起譚とかかわる聖地である。神山のテラガマは小字後原にあるが、神山ウクマバカから南西方向に約四〇m進むと、標高一〇六mを図る低平な丘陵上部に、東西約二m、南北一・五m程の大きさでポッカリと縦穴状に開口するテラガマが所在する。それは、東西に発達し、元来は密閉型の横穴であったものが、洞天の陥没により現在にみる開口部を形成したものと考えられる。従って、洞口の直下は洞床より段上がりの小テラスを形成し、下りにて入洞する。この小テラスから先に進むと、左＝北側には七×三㎡程の小ホールが形成する。洞長は詳査によってさらに延長されようが、五〇m余と長く、その中途の洞天には人工的な空気抜きである縦穴が洞窟を切っている。



ティラガマの平面図と縦断面図

神山ティラガマ内の香炉



神山ティラガマの入り口

今次の沖縄戦において、本洞窟は神山部落一七〇人余の防空壕に利用され、先の空気抜きも一九四三年に三カ月程の期間を要して掘削したものである。また、洞内の所々には避難中の生活用品が散在するが、終戦後、まもなく本洞窟は米軍基地に接収されたために著しく攪拌は免れている。普天間米軍基地内のため、現在は郷友会事務所敷地内の拝所で遥拝されている。神山ではテラガマについて次のように伝えられている。

首里桃原から二人の姉妹がウー糸をつなぎながら、神山までのがれ、テラガマにこもった。或る日、姉はガマにひそみ、妹が外に出て用を足していた。肉売りの行商人が通りかかり、妹を見て、その美しさにびっくりした。妹が「私の姉は、まだきれいだ」と言うと、その男はどうしても見たくて妹にせがんだ。妹は仕方なく、私がつまずく真似をしてアキサミヨーと言えば姉はガマから出てくる筈だろう言い、ころんだふりをした。ガマから現れた姉を見て、男は思わず「見た、見た」と叫んだ。男に見られたことを恥じて姉は妹と共に、またウー糸をつなぎ引っ張りながら、普天間のガマに入ってしまった。（佐喜眞盛経氏談）

『遺老説伝』に記す縁起からさらに変化した話型が嘉数と神山で語られており、しかも、話の主題がそれぞれのテラガマに限定されている。嘉数と神山ではそれぞれ、テラガマと普天間権現はクサイ（鎖・つながりがあるものという意味）といい、普天間権現に類する聖地とみなされている。

本洞窟は神山部落の人々によって、戦前まで六月の綱引きや九月のウマチーのときに拝される祭祀場のひとつであり、さらに、ハマウリと称して〝厄払い〟を行うところでもあった。

戦後は年中の折目に神山郷友会の役員たちは前述の拝所で遥拝している。その際には拝みのできる勝手の婦人に依頼していた。

四、宜野湾・神山シリガーラ古墓群

市立宜野湾小学校の南西側に、宜野湾と神山部落を区分けするシリガーラと呼ばれる小川が流れている。その川筋は、国道三三〇号の北西側では幅一〇〇m程の袋状凹地を貫流したものが、普天間飛行場基地に至ると左右に石灰岩丘陵の崖面が張り出して視界を遮るようになる。

約三〇〇mの長さをみるその川筋の急峻な両崖および北側丘陵上面には、自然洞窟や岩陰を利用した天蓋部に庇を形成しない掘り込み墓や後背の石灰岩を掘削して墓室を造成した亀甲墓や平葺墓など、宜野湾・神山部落の住民が占有する数多くの古墓が散在する。古老の中には、「自分たちはシリガーラのイリク（子孫）・クシヌウタキのクシヒッケーリ（分家）」とも想念され、一帯の古墓群は両部落の一門ないし当該世帯の草分けを葬る場と把握されている。そして、比高七mの西側の高まりには、宜野湾クシヌウタキ遺跡が所在する。

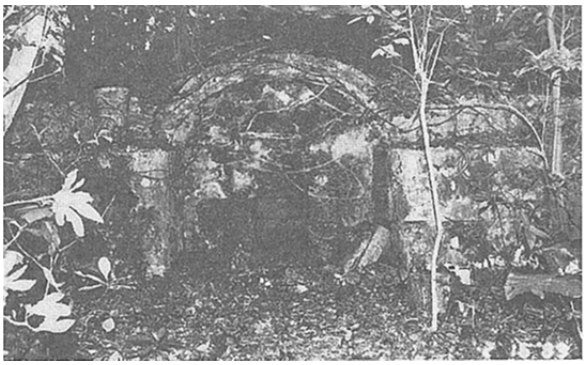
現在、古墓群一帯は米軍による一九五〇年代の墓立ち退き命令によって、慌ただしく移送されたためか、蔵

骨器や遺骨が散乱したり、それらすべてが移設されて空墓となっているものが多い。

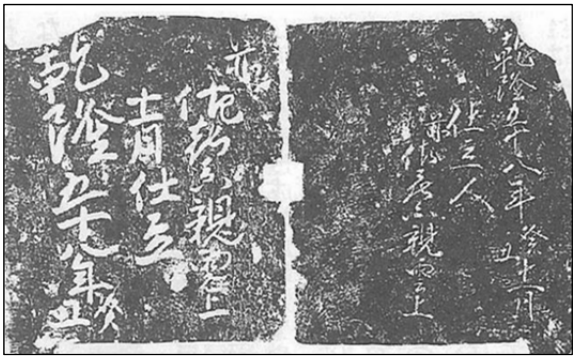
基地内に流水するシリガーラと同古墳群
いこいの市民パーク側より

古墓群の特徴

総じて、シリガーラに接する川涯の両崖面にはより古式や無庇の掘り込み墓が多く、対して北側の丘陵上面には亀甲墓や破風墓等の時期の新しい古墓が林立する。また、宜野湾部落の御嶽のひとつであるクシヌウタキ頂部の東端には石造の祠が二基あり、右側に玉那覇一門、左側に大里一門の祖先の骨神を祀ると伝える。それは、約八〇年程前にカニマンと呼ばれる洞窟から嘉手苅・玉那覇・大里の人々が移骨したものであるとされる(宜野湾在、玉那覇ナエ氏談)。その祀りに南接して開口する後原洞窟(仮称)は、洞長一五mの長さで北側のシリガーラへ貫通するが、その洞口を切石で塞いで墓室に利用している。シリガーラの川下南岸の亀甲墓には、「前佐喜真親雲上　十一月仕立　乾隆五十八年(西暦一七九三)」と石灰岩に刻字された墓誌が二例確認されている。それは、奥壇の正面壁の左右に掘り込まれた一対のシチキと呼ばれる合葬納骨施設の蓋に相当するものである。



乾隆 58 年(1793 年)仕立ての亀甲墓の正面景
;北方より



合葬納骨施設の墓に乾隆 58 年仕立て銘が刻字された墓誌

保護に向けて

本古墓群は、その是非はともかく米軍基地に接収されたために、戦後の墓造成ないし改造を経ていない「古墓のタイムカプセル」である。それらは、古琉球にまで端緒が求められるであろう川縁所在の古式の掘り込み墓群と、それから分立する北側丘陵上面の亀甲墓・平葺墓等の新群に二大別され、一帯の住民の歴史展開を語る重要な文化財地域といえる。加えて、県下でも数少ない造墓年代の知れる墓誌、石製・素焼き土器製・陶製など様々な蔵骨器の組み合わせをもつ古墓も確認されるなど、沖縄の葬墓制を知るうえで貴重な資料が含まれる。

幸いにも、宜野湾郷友会が地域誌『ぎのわん』を刊行し、市教育委員会当局にクシヌウタキ遺跡の保全を陳

情するなど、新たな「文化財保護」の気運もあるので、クシヌウタキ遺跡と当該古墓群を一体としてフェンスで囲うなどして、その保護を図る必要がある。

五、神山ウクマバカ洞窟遺跡

宜野湾自動車学校の西側にみられる沢は、北東方へと発達し、やがて草木の繁茂する渓谷へ連なる。世界文化アパートの西側にみえるその渓谷一帯は、普天間飛行場の中にありながらも、戦後の土地改変の波を被ることなく、戦前来の地形が良好に保全されている地域である。

ウクマバカは、その渓谷の西崖にあるマーカーガマの上位、比高九m程の崖縁に所在する横穴洞窟で、イクサバカとも呼ばれる。標高一〇四m内外の高位段丘に位置するこの界隈には、他にも「線刻石板」の出土をみたテラガマやアンガーなどの洞窟が知られる。また、付近の部落の墓処のみならず、中城村在の人々の亀甲墓も錯綜する墓地地帯でもある。ウクマバカの一角にも、『大清康熙四拾四年乙酉八月八日中城間切奥間□□』銘書きの蔵骨器が安置されている。そのひとつにはマーカーヌトゥリウフスーの御骨が、さらに、神山部落の創始家とされるヒジャの祖先も祀られていると伝える。そのためか、かつて、ヒジャのカミシーミーには、そこを祈願したという(野嵩在、下田カメ氏談)。

洞窟は、やや南面する入洞口より落差のある五二㎡の主広間を軸として、その西側前庭には野面石積みにて画された二八㎡の平坦地が、東側には一二㎡程の袋状ホールが形成されている。西側ホールには先に述べた銘書きのある蔵骨器を含め四基の石製と七基の陶製甕型蔵骨器および破砕された一基の素焼き蔵骨器が安置されており、東側のそれには人骨片と共に素焼き土器製蔵骨器の破片が散在している。さらに、本洞窟の東側に連なって、開口部を野面石積みにして遮蔽された二㎡程の掘り込まれた小岩陰が二つ所在し、蔵骨器などが据え置かれている。なお、主広間の下位にもスペースのあるホールが形成されているが、入洞は果たされない。

寺窟とウクマバカの位置する奥の丘陵
;東方より

ウクマバカ洞窟内の西側ホールに野面石積みで囲い込まれた蔵骨器群

出土遺物

主広間よりリュウキュウザルガイの殻頂部を穿った海産貝殻と共に貝塚時代前期に位置づけられると考える土器細片が、東側のホールの開口部の斜面から貝塚時代後期に相当すると思われる土器片が得られている。

六、神山後原丘陵古墳群

神山ウクマバカ洞窟・テラガマ両遺跡の所在する標高一〇〇m台の石灰岩丘陵には、他にも数多くの石造ないしセメント造りの亀甲墓・平葺墓が散在する。それらの古墳群は、マーカーと呼ばれる南東ー北西方向に延びる自然渓谷にて東西に分割され、行政小字ではマーカーおよびその西側は神山後原に、東側は赤道渡

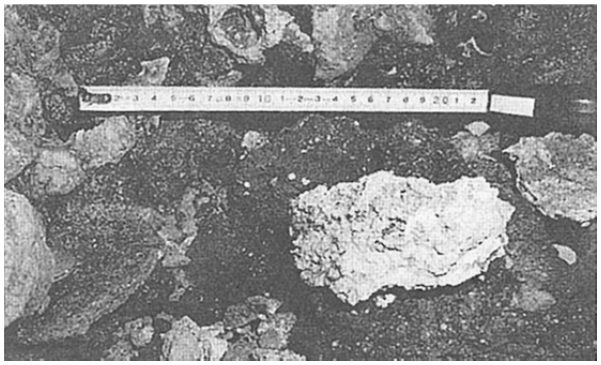
呂寒原に区分される。古墓の多くは丘陵上面に見られる幾つかの微高地の裾まわりに造成され、微視的にみればその高まりごとに小区分される。古墓の間を縫って幾筋かの墓道が走る。

なお、マーカーの渓谷一帯は、断崖あり流水ありのこれが宜野湾市の自然かと見まがう起伏に富んだ地形をなしており、渓谷の西側には現在長二一〇mを測るマーカー洞窟が所在する。

古墓の特徴

概して、丘陵上面に散在する本古墳群の多くは造築年代が新手に属し、現在でも旧七月七日のタナバタに清掃を行うなど、利用・占有する人々が特定されるものである。利用者の一部には、近隣の中城村上原や奥間在の住民などが含まれる。対して、本古墳群に接合して北側に集在する赤道渡呂寒原古墳群は、亀甲墓ひとつをとってもより古式に属し、宜野湾部落の旧家などが係わる古墓が散見される。詳細は未調査であるが、マーカー東側丘陵部の東崖下に岩陰利用の古式掘り込み墓が連なる。

数多くの蔵骨器を安置するウクマバカ；東方より



洞窟東ホール土器片の出土状況

基地内に散財する後原丘陵古墳群と寺窟と
ウクマバカの位置する奥の丘陵；東方より

保護に向けて

先述するように本古墳群の多くは、付近の住民によりいまだ利用され良く清掃管理されている。従って米軍基地の枠を外し、その管理運用を助成する必要があろう。

七、神山之塔

宜野湾並松街道沿いのミーハギウシナー（闘牛場）で有名な神山部落は、宜野湾村でも旧部落に属し、比較的生活の安定した部落でした。一九四四（昭和十九）年頃の世帯数は八十四戸、人口は四六七人。

部落の中心部に赤瓦葺の村屋（ムラヤー）を有し、部落内には製糖小屋（サーターヤー）、共同湧泉、クムイ（溜め池）、御嶽（ウタキ）、頓（トゥン）、按司墓（アジバカ）などがありましたが、すべて戦争で燃えてしまいまし

た。

一九四四（昭和十九）年六月頃から日本軍の石部隊、球部隊が吉山（ユシヤマ）、吉元（ユシムトゥ）前徳村（メートゥクムラ）、美地（ミージ）、徳村（トゥクムラ）、仲元（ナカムトゥ）、西山城（イリヤマグシク）、新伊佐小（ミーイサグゥア）の民家に駐屯するようになりました。

部落民は、飛行場や陣地構築などの徴用で毎日十人程度が動員されました。また、日本軍の食糧調達のため、芋、野菜などの供出も激しいものでした。

同部落から県外学童疎開者はなく、県内今帰仁疎開者も体が弱かった数人だけです。ほとんどが部落内の壕に避難しています。部落内には、東から南にかけて数カ所の自然壕がありますが、そのうち五カ所は米軍上陸以前に避難壕として整備してありました。

一九四五（昭和二十）年三月下旬から部落民はこれらの壕に避難しました。空襲が激しくなると、浦添、那覇、大山方面からの避難民も入り混ざり、部落民とのトラブルも起こりました。こうした外部からの避難民も含め、前ヌカーガシラー壕に約二三〇人、後ヌカーガシラー壕に約一〇〇人、ムーティガー壕に約一二〇人、新ガーに約一七〇人、テラガマに約一八〇人が避難しました。これらの住民は、米軍上陸の四～五日後には捕虜となり、北谷、島袋を経て、福山、安慶田などに収容されました。同部落の今次大戦の犠牲者は一二三人です。

戦後五十年余、元居住地は未だ普天間基地下にあります。一九六四（昭和三十九）年、行政区再編で愛知区と合併し十九区となりました。

昭和四九（一九七四）年五月に神山郷友会予算二〇〇万円を投じて建立されました。塔には六二柱が刻銘されています（沖縄県「平和の礎」調査では一二三と報告）。

神山郷友会では、毎年六月二十三日前後に慰霊祭を行っています。

参考資料

「宜野湾市基地内文化財」宜野湾市教育委員会発行
「洞穴」大城逸郎、新垣義雄一九八四　宜野湾市文化財調査第六集
「ぎのわん市の戦跡」第二版　宜野湾市教育委員会発行
「土に埋もれた宜野湾」 宜野湾市教育委員会発行

第2節芸能

四、牛オーラセー＝闘牛大会

神山部落には、月一回開かれる、入場料をとらない「シワキ」とよばれている、今で言うところの練習試合の「牛オーラセー」と、入場料をとる「カッシン」と呼ばれる「牛オーラセー」がありました。どちらも、農作業から、開放されて、楽しむ催し物のひとつになっていました。

「ウシオーラセー」 ー神山の闘牛ウシ
屋号（新富川）
執筆者：富川　盛光
一九四九年生（昭和二四）
はじめに

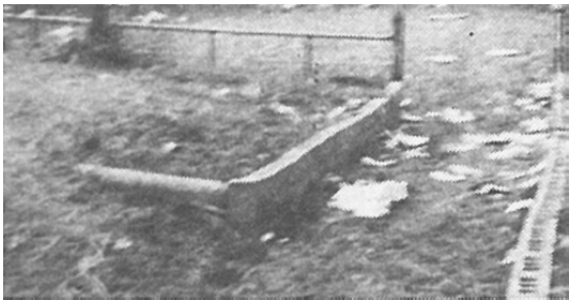
私が小学校高学年の頃、愛知闘牛場（松ボックリ公園）でよくウシオーラセー（闘牛）を観戦したことが思い出

される。当時、農村での唯一の娯楽は映画・沖縄芝居・闘牛観戦が主だった。

闘牛が開催される日曜日の朝は、夜も明けぬうちからムシロを担いで場所取りのため闘牛場へ出かけた。遅れて行くと、いい場所は確保されていて見づらい場所を取る羽目になるからである。適当な場所を見つけるとムシロを敷き、風にムシロが飛ばされないよう四隅にこぶし大の石を置き、家に戻って朝食を済ませ、親と一緒に早い時間から闘牛場へ足を運んだ。

また、第一回全島闘牛大会が行われた時は、父の運転するオートバイの後の席に乗って、まだ夜の明けきらぬ中を松本闘牛場へいった。着いたころには東の空が白々と明るくなり始めていた。闘牛が始まる頃には、すり鉢状の闘牛場は立錐の余地もない人々で埋まり、異様な盛り上がりであったのが今でも思い出される。勝負がつくと、飼い主や関係者は観客席から投げ入れられた祝福のティーサージを拾って角に巻き、また賞品のサラシを胴に巻き、主催社から贈られた大きなタオルを背中からかけた。勝ち牛の周りに群がり、カチャーシーを舞う姿があった。

また牛の背中に跨り踊る姿も見られた。



愛知闘技場＜沖縄の闘牛（前宮清好）より＞

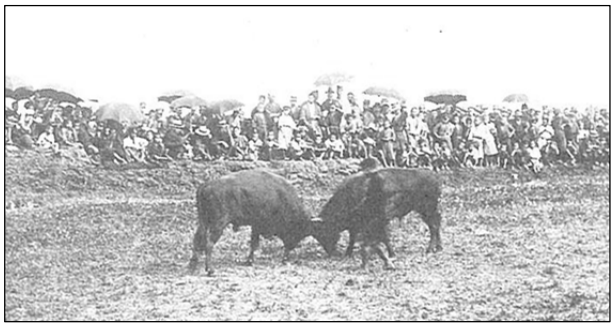
牛に跨がり、踊る佐喜真虎雄さん＜上原由郁さん提供＞

闘牛はいつ頃から始まったか

いったい沖縄でいつの頃から闘牛が始められたのであろうか。その起源については諸説があり定かではない。首里に松村宗棍（一八〇九～一八九九　生まれ年は複数説あり）という武人が猛牛と闘ったという逸話がある。当時、闘牛が行われ、強すぎて対戦牛が見当たらず、武士松村と闘わせてみようという逸話だったのか、たんなる暴れ牛と闘ったのかは定かではない。

「沖縄県史第六巻文化2」には「明治の初めの頃に牛佐事がいて鉦を叩き、人をあつめて、原っぱで牛をけんかさせて・・」と記されているから、明治の初めの頃には、農村の娯楽として闘牛が始められていたと考えられる。また、同県史には、一八八五（明治十八）年ごろ、闘牛場がすりばち状にできたと記されているから、農村の娯楽の一つとして盛んに行われていたのであろう。明治から昭和の初め頃まで「アブシバレー」「原山勝負」の余興として闘牛が行われていた。その頃の農村では娯楽は乏しく、遠くの村（島尻）辺りで闘牛が行われると、前夜の九時ごろからカーサ弁当を引っさげて夜通し歩き続け、夜明けに闘牛場へ着くと、持参した弁当を食べてから、闘牛が始まるまで仮眠して疲れをいやしていたと、古老の一人は語ってくれた。

明治時代の闘牛＜琉球大学付属図書館提供＞



大正時代の闘牛＜琉球大学付属図書館提供＞

戦前の神山の闘牛場と闘牛

神山には明治の頃、神山後原ウシナーがあったという。神山テラガマの北、五十メートルほどの所にあり、直径二三～二五メートルのいびつな円形で、北側と西側に八十～九十センチほどの土盛がみられる。

この闘牛場で明治の後期に対戦した闘牛の一頭が観客を突き倒し殺傷したとして、闘牛場として危険だということで廃棄され、その後、神山では明治四四年に新たに黒数原に移設したといわれている。神山では闘牛が盛んで、闘牛用の牛を飼っている家庭も多く、また、カッシン（大きな大会）に出るような闘牛ではないが、多くの家庭に牛がいて、よくマルオーラセー（練習試合みたいなもの）を楽しんでいた。

神山後原ウシナー跡（基地内テラガマ近く
＜宜野湾市教育委員会文化課提供＞